CIRAS Discussion Paper No. 102

装いと規範 4

「価値」が生まれるとき

帯谷知可・後藤絵美 編

京都大学東南アジア地域研究研究所

目次

序言
帯谷 知可（京都大学東南アジア地域研究研究所）…… **3**

■報告１
古着から展示可能な民族衣装へ
―― 中国少数民族の装いにおけるグローバルな広がりと価値の変遷
佐藤 若菜（新潟国際情報大学）…… **6**

■報告２
ナミビア・ヘレロ人のエスニックドレスに見る歴史性とファッション
―― ４つのショーから
香室 結美（熊本大学）…… **14**

■報告３
唯物論の神はイスラームグッズを祝福し給う
―― 世界の工場 中国の経験を垣間見る
松本 ますみ（室蘭工業大学）…… **25**

コメント１
安城 寿子（阪南大学）…… **36**

コメント２
杉浦 未樹（法政大学）…… **38**

コメント３
杉本 星子（京都文教大学）…… **40**

ディスカッション…… **42**

付録 …… **47**

CIRAS Discussion Paper No. 102
Chika OBIYA and Emi GOTO (eds.)
Fashion and the Norms 4:
When "Values" are Created

©Center for Southeast Asian Studies, Kyoto University
46 Shimoadachi-cho, Yoshida Sakyo-ku, Kyoto-shi,
Kyoto, 606-8501, Japan

TEL: +81-75-753-7302
FAX: +81-75-753-9602

March, 2021

序言

本ディスカッション・ペーパー『装いと規範４――「価値」が生まれるとき』（CIRAS Discussion Paper No.102、京都大学東南アジア地域研究研究所、2021年）は、ワークショップ「装いと規範」第４回（2021年２月６日開催）の記録を基にしたものである。このワークショップは、新学術領域研究（領域提案型）「グローバル秩序の溶解と新しい危機を超えて――関係性中心の融合型人文社会科学の確立」（「グローバル関係学」、領域代表：酒井啓子、千葉大学）の計画研究Ｂ01「規範とアイデンティティ――社会的紐帯とナショナリズムの間」（研究代表者：酒井啓子）主催、京都大学東南アジア地域研究研究所CIRAS共同利用・共同研究プロジェクト「中央ユーラシアおよび中東ムスリムの家族・ジェンダーをめぐる規範――言説とネットワークの超域的展開」（研究代表者：磯貝真澄、東北大学）共催により実施された。

「装いと規範」と題するワークショップは2018年より毎年開催してきたもので、過去の第１回～第３回の開催報告、ならびにそれぞれの成果として刊行したディスカッション・ペーパーについては以下をご参照いただきたい。

●**第１回**（2018年２月10日、京都大学にて開催）

開催報告：http://www.shd.chiba-u.jp/glblcrss/activities/activities20180603.html

ディスカッション・ペーパー：帯谷知可・後藤絵美編『装いと規範――現代におけるムスリム女性の選択とその行方』（CIRAS Discussion Paper No.80、京都大学東南アジア地域研究研究所、2018年）https://repository.kulib.kyoto-u.ac.jp/dspace/handle/2433/234695

●**第２回**（2019年２月９日、京都大学にて開催）

開催報告：http://www.shd.chiba-u.jp/glblcrss/activities/activities20190113.html#article

ディスカッション・ペーパー：帯谷知可・後藤絵美編『装いと規範２――更新される伝統とその継承』（CIRAS Discussion Paper No.85、京都大学東南アジア地域研究研究所、2019年）https://repository.kulib.kyoto-u.ac.jp/dspace/handle/2433/244062

●**第３回**（2020年２月10日、京都大学にて開催）

開催報告：http://www.shd.chiba-u.jp/glblcrss/activities/activities20200128.html#article

ディスカッション・ペーパー：帯谷知可・後藤絵美編『装いと規範３――「伝統」と「ナショナル」を問い直す』（CIRAS Discussion Paper No. 95、京都大学東南アジア地域研究研究所、2020年）https://repository.kulib.kyoto-u.ac.jp/dspace/handle/2433/252447

当初、イスラーム・ヴェールをはじめとするイスラーム的装いへの関心からスタートし、報告者もコメンテーターもイスラーム圏の研究者であったこのワークショップも、回を重ねるにしたがって、日本のキモノ、アジアの学生服、インドのサリーというように、地域も関心も大きく広がっていくこととなった。この一連の流れの中で、「装いは、価値観や信念、思想、規範など、目には見えないものを映し出す鏡である。その時々のファッション（流行の装い）に目を向けたとき、我々は、それぞれの時代、それぞれの社会における人々が、どのような美意識を持ち、何を大切にしていたのか、そして、どのような枠組みの中に生きていたのか、その一端を知ることができる」との視座を共有しつつ、「装い」を衣服・衣装に限定せず、装飾品・化粧・髪型なども含むものと広くとらえ、世界各地の事例の多角的検討を通じて、装いから何が見えてくるのかを探る、という趣旨を継承しながら、さらに、装いにおいて「現代」、「国家」、「イデオロギー」がどのような意味をもち、「ローカル」、「ナショナル」、「グローバル」がどのように接合され、あるいは組み直されているのかといった問いがより鮮明に意識されるようになってきた。

今回は、報告者として佐藤若菜（新潟国際情報大学）、香室結美（熊本大学）、松本ますみ（室蘭工業大学）の３氏、コメンテーターとして安城寿子（阪南大学）、杉浦未樹（法政大学）、杉本星子（京都文教大学）の３氏をお迎えした。総合司会は帯谷知可（京都大学）が務めた。当日のプログラムは本書47ページに掲載している。オンライン開催という形態ゆえか、参加者は30名を超え、これまでで最大の数となった。以下、各報告について簡略に紹介しよう。

佐藤若菜氏による報告「古着から展示可能な民族衣装へ――中国少数民族の装いにおけるグローバルな広がりと価値の変遷」は、その著書『衣装と生きる女性たち――ミャオ族の物質文化と母娘関係』（京都大学学術出版会、2020年）で扱われた、中国の少数民族ミャオ族ムウの民族衣装をめぐる人類学的研究をさらに発展させたものである。今日では、豪華な刺繍がほどこされた色鮮やかな、独自性の高い民族衣装として広く世界に知られたミャオ族の衣装に、「展示可能なモノとしての価値」が見出されていく過程を丹念に追い、そこに日本が大きく関わっていたことも明らかにされた。

香室結美氏による報告「ナミビア・ヘレロ人のエスニックドレスに見る歴史性とファッション――４つのショーから」は、その著書『ふるまいの創造――ナミビア・ヘレロ人における植民地経験と美の諸相』（九州大学出版会、2019年）の一部によるものである。ナミビアのヘレロ人女性が今日「エスニックドレス」として着用する、元々は植民者でありヘレロ人に対しジェノサイドさえ行ったドイツ人の衣装の模倣から発展した「ロングドレス」を取り上げ、国内外で開催された4つのファッションショーの分析を通して、この

ロングドレスをめぐって複雑に交錯する歴史性、信仰、規範、美の追求といった原理について論じている。

松本ますみ氏による報告「唯物論の神はイスラームグッズに祝福を与え給う――世界の工場　中国の経験を垣間見る」は、国内では宗教統制をますます強化しながら、国外に向けてはあらゆる宗教グッズを販売し、その販路を拡大する中国の現状を、その背景も含め、多角的に論じている。今では現地調査がほぼ不可能となった義烏の巨大な見本市のかつての様子や、現在隆盛を極めるネット通販アリババの商品情報などを交えながら、イスラームグッズの生産と流通という視点からもますます存在感を増し、世界を席捲しつつある現代中国の姿が浮き彫りとなった。

続くコメントとディスカッションでは、民族衣装とグローバルなファッション市場の関係性、美意識をめぐる集団内部での世代間格差、歴史・政治・イデオロギーと装いとの関係性、装いに価値が付与される過程における製作者の役割、エスニック・グローバル・ナショナル・ローカルを還流する装いの価値、装いの消費と商品化、民族衣装製作と女性のエンパワーメントとの結びつき、服飾材料の多様化・差異化など、多様な論点が提出され、熱のこもった質疑応答となった。

新型コロナウイルス感染拡大に伴い、本ワークショップとしては初めて、Zoomによるオンライン開催となったが、多数のご参加を得、実りある議論ができたことはたいへん幸いであった。

なお、本書は新学術領域研究（領域提案型）「グローバル秩序の溶解と新しい危機を超えて――関係性中心の融合型人文社会科学の確立」（「グローバル関係学」、領域代表：酒井啓子、千葉大学法政経学部教授、研究課題／領域番号1801）計画研究Ｂ01「規範とアイデンティティ――社会的紐帯とナショナリズムの間」（研究代表者：酒井啓子、研究課題／領域番号16H06549）の2020年度の研究成果の一部である。

2021年3月

帯谷 知可

報告1

古着から展示可能な民族衣装へ
中国少数民族の装いにおけるグローバルな広がりと価値の変遷

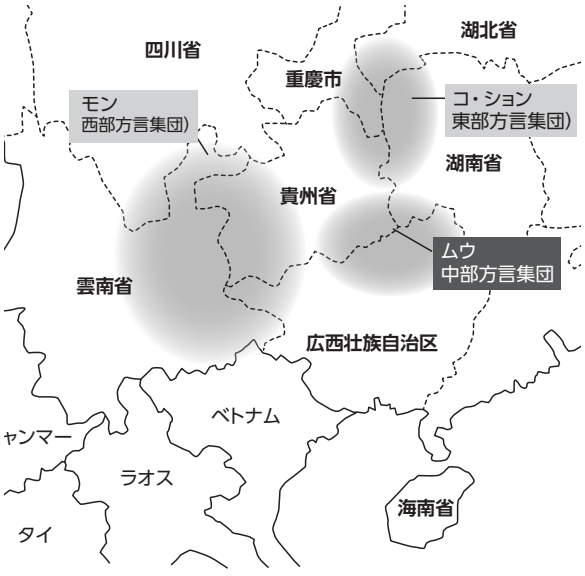
佐藤 若菜
新潟国際情報大学

私はこれまで中国貴州省東南部のミャオ族について、2009年３月から2011年５月までの調査をもとに、文化人類学的視点から民族衣装を通したコミュニケーションを中心に研究してきました。具体的には、衣装の製作・着用・保管・所有・譲渡からみたミャオ族の母娘関係と、その他のさまざまな社会関係について分析してきました。その内容については、2020年の２月に出版した『衣装と生きる女性たち――ミャオ族の物質文化と母娘関係』という本にまとめました。

調査地とミャオ族の概要

調査地は、中国の西南部、雲南省や四川省がある、東南アジアに近いエリアです（資料１－１）。そのなかでも貴州省が、ミャオ族（苗族）の集住地の一つとして知られています。ミャオ族にはモンをはじめさまざまなサブ・グループがありますが、なかでも私はムウという中部方言集団について調査をしてきました。

ミャオ族は、中国共産党によって公認された55ある少数民族の一つです。中国国内には約942万6,000人いて、少数民族のなかでは統計上５番目に人口が多いと言われています。



資料１－１　調査地概要

ミャオ族は、自称や言語、居住地が異なる多様な民族集団を吸収することで形成されてきたと言われています。ムウとコ・ションとモンだけではなく、たとえばムウのなかでも、貴州省東南部に住むムウはさらに39の下位集団に分かれるのではないかとも、民族衣装ベースの調査などでは言われています。

ムウはミャオ族の人口数の約60パーセントを占めており、1980年代後半以降に公開された情報がもっとも多く、外部からのミャオ族認識に対して、確固たる民族イメージを築いてきた民族集団と言われています［谷口 2003］。特にムウ女性の民族衣装に注目が集まり、ミャオ族文化の「模範的中心」として扱われてきたと言われています［鈴木 2012］。たとえば中国国内でお酒や調味料のパッケージに写真が使われたり、テレビや雑誌にもたびたびムウの女性が出てきたりということで、ミャオと言えばムウの女性を想像することが多いのです。

今回の報告では、ムウの民族衣装がグローバルに広がっていくなかで、どのようにローカルに影響を与えてきたのかを考えてみたいと思います。

世界の博物館・美術館が所蔵するムウの衣装

ムウの衣装が世界中に広まったことを端的に表す事例として、世界各地の博物館・美術館に所蔵されている点が挙げられます。たとえば有名なところでは、大英博物館やアメリカの民芸国際博物館、フランスのリヨン織物装飾芸術博物館にも所蔵されていますし、ニースの国立東洋美術館にもあります。

イギリスやフランスを中心にコレクターや研究者が多いですが、それ以上に多いのが台湾です。台湾にあるカトリック系の輔仁大学には織品服装研究所があり、そこでは大量に民族衣装を所有し、分析しています。個人コレクターも多く、たとえば長河芸術文物

館にはたくさんの収集品があり、2008年には、このコレクションが優れているとして、ハワイ大学で長河芸術文物館のコレクションを展示しています。

中国国内でも、中国美術館や北京民族文化宮など、主要な芸術や民族に関わる政府機関がミャオ族の民族衣装を所有しています。もちろん個人コレクターもいて、もともとミャオ族を中心とした写真家だった方が、写真を撮るなかで民族衣装を集めて建てた苗疆故事民族服飾博物館もあります。

日本ですと、国立民族学博物館や文化学園服飾博物館、神戸ファッション美術館もミャオ族の民族衣装を所有しています。個人コレクターもいて、ミャオ族刺繍博物館が名古屋の常滑にあります。また岩立フォークテキスタイルミュージアムにもミャオ族の民族衣装が所蔵されています。

この他にも、ファッションへの展開も盛んに行われています。たとえばエルメスの2010年秋冬コレクションでは、「ミャオ族の100の襞」というタイトルでミャオ族のスカートをデザインしたスカーフが販売されています。また、クリスチャン・ディオールの1998～1999年の秋冬コレクションのジュエリーについて、ジョン・ガリアーノというデザイナーが「中国のミャオ族からインスパイアされた」と2015年のインタビューで話しています。

ミャオ族の民族衣装への注目

新中国成立以降、ミャオ族文化のなかでもっとも注目されてきたのが民族衣装だと言われています[Schein 2000：54, 61]。中国では、1950年代からミャオ族の民族衣装を文化や芸術とみなした研究が始まり、1980年代以降には急激に増加したとされています[楊 1998：315]。特に世界中の研究者や染織家、写真家、収集家、ガイドなどがミャオ族の民族衣装に注目しました。

1956年から1957年にかけて、中国の民族政策の一環として少数民族社会歴史調査が行われました。そのなかでミャオ族の民族衣装も調査され、その後文化大革命を経て、1984年に北京民族文化宮という政府機関で「中国ミャオ族服飾展」が開催されました。多くの研究者が、この「中国ミャオ族服飾展」がミャオ族の衣装が国際的に認知され始めたきっかけだと指摘しています。

私も、たしかにこの展示が大きく広まるきっかけだったことは間違いないと考えていましたが、それ以上の情報が長らくなかったので、「北京民族文化宮での中国ミャオ族服飾展までにどのようにして衣装を集めたのか」、「なぜミャオ族の衣装だったのか」といった点について、もう少し掘り下げてみました。

資料１－２　古着から展示可能な民族衣装への流れ

時期	展覧会
1984年	北京「中国ミャオ族服飾展」
1986～1987年	香港「中国ミャオ族服飾」
1987～1988年	アメリカ Richly Woven Traditions: Costumes of the Miao of Southwest China and Beyond
1994年	イギリス Miao Costumes and Related Textiles
1999年	台湾「ミャオ族服飾特展」

1984年を契機として、1985年以降には、ミャオ族の民族衣装に関する研究が増加し、書籍の出版が盛んになります。特にムウの衣装に関しては、工場などで生産されるのではなく、あくまでもミャオ族が手作りしたものが商品化するという流れがあります。同時に、先に述べてきたように、博物館や美術館に所蔵され、また収集家も増加します。こうしてサブグループの多さによる多様で華やかな衣装が、ミャオ族イメージとなって増殖していったとされています[Schein 2000]。

海外での展示会も、やはり1984年以降に増加していきます。まず1984年、北京で「中国ミャオ族服飾展」が開催された後に、中国政府のサポートによって香港で1986年から1987年に「中国ミャオ族服飾」が開催されました。1987年から1988年にはアメリカで、1994年にはイギリスで開催され、その後1999年に台湾へと広がってきます（資料１－２）。

「展示可能」の観点からみるミャオ族の衣装

以上の流れを踏まえて、本報告では「1984年の中国共産党による発掘と展示だけが、ミャオ族の民族衣装の価値の転換に大きな影響を与えたと言えるのかどうか」を考えます。特に注目しているのは、それ以前の動きです。

中国において民族文化が広まるプロセスに関する研究では、共産党への着目がどうしても欠かせないものになりつつありますが、やはり再度そのポイントを問い直すことが必要なのではないかと考えています。2016年からこのテーマに関する研究を始めた

のですが、1980年代以降に出版された本を一つひとつ読んでいって、「どのような人が関わってきたのか」、「誰が衣装を収集していたのか」という情報を少しずつ集めてきました。そのなかで浮上したのが、一つは日本の影響でした。本日の報告では、日本からの影響に着目しながら、少数民族の衣服が展示可能なモノになる過程について明らかにしたいと思います。

報告のテーマに、「展示可能」というキーワードを出しました。この考え方について他の研究を参照しています。2020年に中谷文美先生が*Fashionable Traditions: Asian Handmade Textiles in Motion*という本を出されています。杉本星子先生も参加されている本です。このなかで、「あるモノが文化財になる過程には、消費可能なモノへの転換がある」と指摘されています。

具体的に取り上げられているのはインドネシアの事例です。スハルト政権崩壊以来、インドネシアでは地方分権化が進み、各自治体は独自の文化を強調することで、他地域との差異化を図ってきたと言われています。西ティモールでは、村長の妻を中心とした女性の収入創出プロジェクトのなかで、色鮮やかな縫取織り（ブナ織り）のチューブスカートが新たに生み出され、村々に広まっていったと指摘しています。ブナ織りは地域全体を代表する手織り布として観光客向けに生産されるようになっただけでなく、現地の女性たちにとっても消費可能なもの、つまりブナ織りをスカートとして自ら身に着けるようになるという転換があったとされています。こうした動きはあらゆる文化財でみられることで、「着用可能」というのはその一部ですが、何らかのかたちで消費可能になっていくことが、一つ価値が大きく変わっていく過程に関わっているのだと指摘されています［Nakatani 2020］。

今回の報告では、着用ではなく「展示可能」という観点から考えます。日本の影響によって、それまで展示されていなかったものが展示可能になることで、価値の転換があったと考えられます。ミャオ族ではどのようなかたちで消費可能になったのか、展示に着目しながら1980年代以前の動きを分析したいと思います。

調査方法としては、聞き取りと資料収集が中心です。1980年代を中心にミャオ族の民族衣装の展示や書籍出版に関わってきた方がたに中国で調査を繰り返してきました。また日本においても、ミャオ族関係の出版に関わっていた京都の美乃美という出版社の元職員の方や、展覧会に関わった三越の資料室にもうかがって、資料収集やインタビューなどを行いました（資料１－３）。

資料１－３　聞き取り調査概要

調査時期	対象者
2015年3月 2016年9月	元貴州省美術家協会の職員（F、M）
2017年2月	出版者美乃美の元職員（K）、 人民美術出版社の元職員（H）
2017年3月	出版者美乃美の元職員（K、S）、 人民美術出版社の元職員（H）
2017年3月	三越資料室で展覧会の資料収集
2019年3月	貴陽市工芸美術研究所等の元職員（L）、 個人博物館経営者（Z）

美術工作者による図案収集と創作活動

まず、ミャオ族の民族衣装が広まったきっかけの一つとして、美術工作者による図案収集とそれに基づく創作活動についてお話しします。

1949年に中華人民共和国が成立し、1950年以降、民族政策のもとに民族調査が始まりました。そこでは生業、社会状況、風俗習慣などを調べていました。

1957年、貴州省東南部でその調査が行われました。３か月間行われた調査のなかで、民族衣装がかなり細かく調べられました。たとえば、①性別・年齢別の衣装はどんなものか、季節別、場面別、儀礼別にどんな衣装を着ているのか、②材料調達から製作までの工程や、③上衣、頭布などの形式・紋様・色彩の分析、④衣装形式や居住域に基づく衣装分類、⑤男女別の衣装の変化などが調査されました［貴州省編輯組（編）1986：313］。

この調査のなかでも特に重視していたのが、衣装分類だと言われています。衣装を通してミャオ族のサブグループを分類していく、どの地域にどういったミャオ族がいるのかを分類することが、長年にわたって中国で盛んに行われてきました。

その衣装分類のなかでとりわけ注目された点が、衣装の特徴および刺繍の特徴と、分布域とがどのように対応しているかということです。調査資料には資料１－４のような刺繍の図案も掲載されています［貴州省編輯組（編）1986］。

1950年代に出版されたミャオの衣装に関する書籍の一つの特徴として、民族衣装全体を示したもの

資料1－4　刺繍の図案
［貴州省編輯組（編）1986］

はまったくありません。刺繍や紋織を拡大して撮影したもの、それを模写したものだけが出版されています。

少し後になりますが、1960年代にも中国国内ではいくつか展覧会が行われていたことが、資料収集からわかってきました。基本的には、図案の模写か、政府機関に所属している美術工作者が創作した民族的特色のある工芸美術作品を展示しているのみです。私の知るかぎりでは、展示品のほとんどが民族衣装の図案、もしくはその図案をもとにした創作物であったことがわかっています。

美術工作者による創作物には、ミャオ族のろうけつ染めの図案の一部を取り出して並べかえたり、同じようにろうけつ染めで表現したり、もしくは刺繍やろうけつ染めにある表現を陶器などに反映させた作品がありました。こうした創作物のために民族衣装が収集されてきたわけです。

1953年から美術家協会貴州分会に勤務してろうけつ染めを製作していた漢族の男性職員の方にインタビューをすると、「1953年に着任してすぐに民族衣装を収集し始めた」とのことでした。「1956年ごろからミャオ族のろうけつ染めに関心を持ち始めて、特に図案を収集しようと思い立った」と話しています。当時はカメラがないので、農村を回って一つひとつ絵を描いていたそうです。

また、当時はミャオ族の民族衣装には商品や芸術品としての見方がなく、「汚いとさえ思っていた」と話していました。つまり民族衣装そのものに対しては、着古したもの、汚いものという認識があったわけです。農村部に住む人に対する蔑視や少数民族に対する蔑視は現在も多少ありますが、当時は現在よりも強かったのではないかと思います。

なぜ図案に注目したのかを訊ねると、フランスに留学したことのある雷圭元先生の授業で図案学を学んだとのことでした。日中戦争の時期に、沿海部の多くの知識人は内陸のほうへ逃げていきました。そのなかで雷先生は貴州省へ逃げていき、たまたま民族衣装を目にしたと言っていたそうです。雷先生はその男性職員に「ミャオ族や少数民族の図案は価値のあるものだから、貴州省へ行きなさい」というアドバイスをくれたそうです。そのため彼が貴州分会に着任してから、衣装を収集しつつ図案を集めるようになったようです。

勤務時期としては少し後になりますが、1973年以降に貴州省の美術関係の政府機関で働いていた職員の話によると、彼が小学生だった1950年代には、民族衣装を良いものと思ったことはなかったそうです。ミャオ族は農村部に住んでいますが、「町に野菜や果物を売りに出てきているミャオ族を見かけることがあったが、決して美しいと思ったことはない。とにかくぼろぼろで汚いイメージしかなかった」と話していました。しかし、1979年の貴陽市工芸美術研究所に着任していた時期に、「民族衣装の収集活動を始めて、図案を細かく見るときれいなのだと気付いた。だからこれを陶器や青銅器の模様として残していこうと思った」とインタビューでは語っていました。

つまり当時の民族衣装については、衣装そのものを展示するとか、もしくはそこに価値があると考えるのではなく、図案に着目してそれを収集し、またそれを別の作品に反映していくという扱いが、中国では主流を占めていたのだと思います。

以上の内容を簡単にまとめます。1950年代から複数の美術関連の機関が農村で民族衣装の収集・調査活動を開始し、そこで模写した図案を自身の創作物、絵や陶器に反映させていたことが、中国での調査からわかりました。当時、民族衣装の図案だけが注目されていた理由として、衣装そのものへの評価が低く、図案の美しさだけが評価されてきたことが挙げられます。これはもちろん当時の少数民族への蔑視も関連していると思います。加えて、中華民国期のフランス留学者による図案学の導入、日中戦争時の民族との接触が、民族衣装の図案を取り上げる要因となっていたことがわかりました。

改革・開放政策直後に日本で開かれた展覧会

次に日本側の調査結果についてまとめます。1978年に中国で改革・開放政策が始まりましたが、その直後に日本で開催されたミャオ族衣装の展覧会に着目

資料１－５　日本での展覧会のチケット

します。

中国国内では1984年に北京民族文化宮で大きな展覧会が行われましたが、その３年前の1981年５月に、三越と出版社美乃美の主催により、「中国55少数民族服飾展」と「特別出陳　貴州苗族刺繍・ろう染・民芸品」が日本で開催されたことについては、これまでほとんど注目されていませんでした。そのチケットが資料１－５です。この展覧会は東京をはじめ６都市で開催され、53日間で来場者数は６万人、展示品は約1,000点だったそうです。かなり大規模な展覧会だったことがわかります。

展示品となった民族衣装は、新中国成立以降30年かけて中国美術家協会貴州分会が収集してきたものだと指摘されています［中国美術家協会貴州分会・中国人民美術出版社（編）1981:5］。ここでは、マネキンに着せるかたちで衣装そのものを展示しています。

中国の論文を読むと、少なくともミャオ族の衣装の国外での展示は日本が初めてだと記載されています。日本での展覧会にあたっては、美術家協会貴州分会から５人、中央民族学院から９人が訪日したと言われています。彼らにとっては、中国少数民族の衣装そのものが展示品としての価値を有することを知る契機となったのではないかと考えています。

中国でインタビューした美術家協会貴州分会に勤務していた漢族男性は、「日本側の関係者から、東京での展覧会の最後に、『今回展示したものをすべて買い取りたい』とお願いされた」と話していました。美術家協会貴州分会にとって、民族衣装が商品として扱われた経験はこのときが初めてで、これにはかなり驚いたそうです。貴州分会だけでは判断できないので、北京に報告して日本側の要請に対する判断を仰いだけれども、結局は販売不可の決断が下されたということでした。このときに「民族衣装は売れるんだ」ということを認識したのだと彼は話していました。

資料１－６　垣本剛一氏（美乃美社長）のあゆみと日本における中国の民族衣装との関わり

1952年	学術出版社「雄渾社」創業
1953年	立命館大学内に営業所を開設
1971年	学園紛争を契機に仏教に関心を持つ 日本仏教普及会を設立
1974年	中国仏教協会の招請により訪中
1974年	工芸への関心から出版社美乃美を設立
1975年	第一次仏教代表団として訪中
1977年	第二次訪中
1980年	『中国仏教の旅』の取材開始。取材のなかで少数民族の布に出会う
1981年	美乃美初の日中合同出版『中国仏教の旅』
1979年	フォークロア・ファッション・ブーム
1979年	日中共同出版『中国の旅』講談社
1978年～	国立民族学博物館「日本民族文化の源流の比較研究」
1979年	国立民族学博物館が民族文化宮（北京）に少数民族の衣装収集を依頼

美乃美が展覧会を開くまでの経緯

次に、京都にあった出版社美乃美がなぜ展覧会を開くことになったのか簡単にお話しします。これには1972年の日中国交正常化が大きく関連しています。実際に日中民間交流が増加するのは1978年の日中平和友好条約以降です。正式な国交を背景に実質的な交流が開始され、これ以降、中国ブームとあいまって日中民間交流が爆発的に増加しました。

美乃美の社長で当時展覧会に関わっていた垣本剛一さんは亡くなっておられて、その息子さんにインタビューを行いました。垣本剛一さん自身は日記のようなものをたくさん残しておられたので、それをコピーさせていただき、どんなことがあったのかを資料１－６にまとめています。そもそも1950年代に

雄渾社を創業し、立命館大学内に営業所を開設したそうです。郭沫若の研究者が立命館にいて、その人たちとの交流もあって中国に関心を持ち始めたという話もあります。

雄渾社は大学生むけに教科書を売っていましたが、1971年になると学園紛争を契機に教科書がまったく売れなくなってしまいました。そうして時間を持て余していたときに仏教に関心を持ち始めて、日本仏教普及会を設立します。その流れのなかで、立命館大学の先生のサポートもあり、1974年に中国仏教協会の招請により訪中することになったそうです。

帰国したあと工芸に関心を持ち始めて、1974年に出版社美乃美を設立します。1975年には第一次仏教代表団として訪中し、1977年にも訪中します。その内容は『人民日報』にも取り上げられています。1980年からは、中国と美乃美との共同で本を出版しようという流れになったそうです。それで『中国仏教の旅』の取材を始めます。その取材のなかで少数民族の布に出合ったということです。

その内容が朝日新聞にも掲載されています。これは垣本さん自身が答えていますが、「『中国は地球の縮図』だそうだ。この国にひとかたならぬ興味をもち、情熱を傾ける。本を出すために、日本の伝統工芸を調べていくと、いつも中国に突き当たった。『陶磁や織物はほとんど中国文化の影響があるし、げたや刺しゅうのクロスステッチも、中国の少数民族にその起源がある。中国はまだ知られてへんね』」と記載されています。最初は日本の工芸に関心を持って、中国に起源があるのだという考えから、どんどん少数民族の文化に関心を持っていったことがわかります。

その後、美乃美では『中国工芸美術叢書』を出版しました。文革終了直後の当時は紙も印刷技術もまったくなかったので、内容は中国で準備して、印刷は日本で行うかたちで出版していったそうです。

なぜ民族衣装に関する大型本を出版し、民族衣装の展覧会を開催することができたのかを考える際に、1970年代、1980年代に日本でどのようなことがあったのかを見てみると、まず、国立民族学博物館（民博）で「日本民族文化の源流の比較研究」という共同研究が行われています。また、この時期の新聞には「日本文化の源流が中国の少数民族にあるのではないか」と説く記事がたくさん掲載されています。こうした動きが後に照葉樹林文化論などのブームにつながっていくのだと思います。1979年には北京の政府機関である民族文化宮に、民博が少数民族の衣装収集を依頼しています。これについてはいずれまとめたいと思っています。

もう一つ、垣本さんの話として、当時の京都では大型本、特に図案や衣装を掲載したエスニックなものはとにかくよく売れたそうです。その要因の一つはフォークロア・ファッション・ブームで、もう一つは、西陣の呉服界で民族紋様が広まっていて、参考にするためにこうした大型本が飛ぶように売れていたという京都特有の事情があったと推測されます。

簡単にまとめると、1978年以降の日中民間交流の急増とそれに伴う日本人による中国文化への関心のなかで、中国少数民族の民族衣装も注目されていきました。その過程で、中国少数民族の民族衣装そのものの展示が行われました。こうした流れには、当時の日本文化の起源を中国文化、特に少数民族文化に見出すような学問的潮流も影響を与えていたのではないかと考えられます。

また、展覧会では1950年代から中国の美術工作者によって、別の目的で収集されてきた民族衣装が使用されました。つまり1950年代に図案の収集という目的で民族衣装が集められてきたわけですが、それが日本との接触によって、今度は衣装そのものを展示する流れにつながっていったことがわかりました。

日本での展覧会開催が中国に与えた影響

中国国内においても、1982年には民族衣装そのものの展示が始まります。ミャオ族のものだけではないですが、「貴州民間美術展覧」では民族衣装の展示が行われました。また、この時期には民族衣装の展示と並行して、図案の展示や美術工作者による創作品の展示も引き続き行われていました。貴州省への注目も高まっていたことが資料からもわかってきました。こうした流れが1984年の北京民族文化宮での展覧会につながっていったのだと思われます。もちろん民博の影響も大きいと思います。日本での展覧会、または日本からの民族衣装収集の要請が影響して、1984年の展覧会につながっていったのではないかと思っています。

本日の報告内容を簡単にまとめます。中華民国期のフランス留学者による図案学の導入や、日中戦争時の少数民族との接触を背景に、1950年代には中国

の美術工作者により少数民族の民族衣装の収集、図案の模写、民族調の作品の創作が行われていました。しかし衣装そのものへの評価は低く、図案の美しさだけが注目されていました。他方、1970年代の日本では中国文化に日本文化の起源を求める動きや日中国交正常化を背景に、中国少数民族の民族衣装が注目され、展示されました。そこで展示品となったのが、1950年代以来、中国で収集されてきた民族衣装でした。1981年の日本での展覧会を契機に、中国でも民族衣装そのものを展示するようになったことがわかりました。

文革終了後、中国の少数民族の民族衣装は展示するモノとしての価値が見出されていったことがわかりますが、その契機となったのは1981年の日本で開催された展覧会でした。ただし、展示するために収集されていたわけではない衣装が、そもそも民族衣装に関心を持っていたわけではない主催者によって展示可能なモノへと転換した過程には、日本と中国において異なる動機が存在し、それらが偶発的に重なることによって展示可能なモノになったという特徴を見出すことができるのではないかと思います。

参考・参照文献

佐藤若菜（2020）『衣装と生きる女性たち――ミャオ族の物質文化と母娘関係』京都大学学術出版会

鈴木正崇（2012）『ミャオ族の歴史と文化の動態――中国南部山地民の想像力の変容』風響社

谷口裕久（2003）「『モン・ミャオ』における移住と文化社会戦略」塚田誠之編『民族の移動と文化の動態――中国周縁地域の歴史と現在』風響社、135-157頁

中国美術家協会貴州分会・ 中国人民美術出版社編（1981）『貴州苗族刺繍』美乃美

Nakatani, Ayami (ed) (2020) *Fashionable Traditions: Asian Handmade Textiles in Motion*, Lexington Books.

Schein, Louisa (2000) *Minority Rules: The Miao and the Feminine in China's Cultural Politics*. Durham: Duke University Press.

貴州省編輯組編（1986）『苗族社会歴史調査（一）』貴州民族出版社

楊正文（1998）『苗族服飾文化』貴州民族出版社

■質疑応答

帯谷知可（司会）　ありがとうございました。たいへん興味深いお話でした。私もかつて10年ほど民博におりましたので、中国展示の少数民族の衣装のパートが充実していることはよく存じています。佐藤さんの著書にも出てきますが、この色鮮やかで刺繍の技術もすばらしいミャオ族の衣装が、美しいもの、展示可能なものとしてクローズアップされていくプロセスを緻密に明らかにしていただいたご報告だったと思います。それに日本が大きく関わっていたということも、とても興味深い点でした。

簡単な事実確認等の質問がありましたら、お願いします。

杉本星子　興味深く報告をうかがいました。私はいま西陣のすぐ横に住んでいるのですが、よく織屋さんに行くと、たくさんの世界の民族衣装や図案の本があります。まさにこの時代にみなさんお買いになったものだなと思ってうかがっておりました。日本側と中国側と意識がずれながら、目的もずれながら、しかしやがてそこが一致してきて……というあたり、まさにそうだなと思いました。

一つ確認です。図案の収集から民族衣装の展示に転換するところです。民族衣装の場合は、技法や素材、スタイルがありますよね。ただ図案が載っている布を展示するのではなくて、衣装として展示するところへの変化が、中国側にとってどういう意味があったのか。これはすでに佐藤さんが書いておられると思いますが、1978年から少数民族の優遇政策が始まります。中国のなかで、少数民族も含めて民族意識が高まっていき、そのなかでスタイルの違いみたいなものが民族のサブグループや、あるいは民族の違いの表象にもなっていたと考えられます。民族「衣装」の展示になるときには、それも一つの要素として大きかったのかなというあたりの中国側の状況をうかがいたいと思います。

佐藤若菜　つまり中国政府による少数民族の位置付けが大きく変わったことが、展示にも大きく影響を与えていたかということでしょうか。

杉本　図案ではなく衣装のスタイルになると、さらにまた民族の違いも明確に出てきますよね。それも含めて、「民族衣装を展示する」ということの意味付けの背景として、少数民族の位置付けの変化が大きかったのでしょうか。

佐藤　1984年の民族衣装の展示で、積極的に行っていたのは分類です。かなり独特な分け方ではありますが、サブグループではなく「5地域に分布していて、こんなにいろいろな種類があります」ということを示しているかのようです。そのように、少数民族に対する細かい分類への注目が大々的に行われているのが一つの特徴だと思います。そういったことが、少数民族に対する関心として大きく表れているのではないかということですよね。

杉本　はい。民族衣装の展示になることの意味の後ろに、それが絡まっているのではないでしょうか。

佐藤　たしかに図案だけを見ている分には、どの地域かというのはすごくわかりにくいです。衣装全体、スタイルとなると、「このエリアはこんなスタイルで」とか「この地域はこんなスタイルで」というようになって、よりミャオ族に関心を持つようなものになります。また、やはり美しいものとして展示されている部分もすごく大きいので、優遇政策というか、「少数民族も平等なんだ」という意識のようなものを宣伝していくことと合致していると思います。

杉浦未樹　報告のタイトルに「古着から」とありましたが、展示しようとしていたものには、同時代に作られたものは入らないということですか。ある程度古いものでないと展示しようと思わないということなのか、伝統や民族の様式にしたがっていたら比較的最近作られたものも含まれるということでしょうか。

佐藤　現在では新品を展示用に作ることはあるかもしれませんが、中国のミャオ族が特殊なのは、自分たちのために作ったもの、もしくはかつて着ていたものを――もちろんきれいなものであればあるほどいいとは思いますが――それを展示していく流れがあります。これは決して展示用ではなく、彼らが使っていたものを展示する。回数はさまざまですが、最低でも一度は着たものを展示しているので「古着」と書きました。もちろん最近作られたものもあると思いますが、あくまでも自家用に作ったものを展示しているという前提がそこにはあると思います。

松本ますみ　1980年代のことは私もよく憶えていて、雰囲気はだいたい想像がつくので、お若い方の探究対象になってしまったのだなという感慨を持ってお聞きしていました。

　1点だけ、三越で1981年5月に行われた展覧会のチケットには「中国シルクロードファッション世界初公開」と書いてありました。おそらく、この時代にはシルクロード・ブームがありました。それでたくさんの人が来たという気がします。当時NHKの『シルクロード――絲綢之路』が始まっていたかと思いますが、それにあやかった企画だったということを、どこかに書いておかれると、どうしてこんなにたくさんの人が来たのかという説明にもなると思いました。

報告2

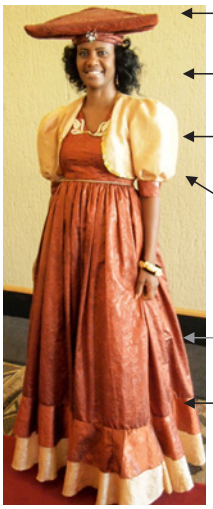
ナミビア・ヘレロ人のエスニックドレスに見る歴史性とファッション

4つのショーから

香室 結美

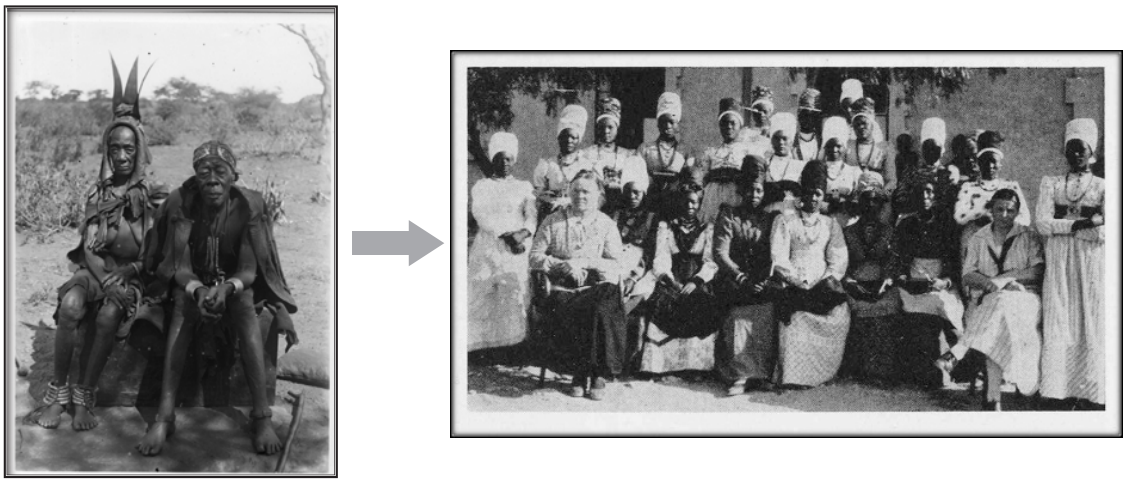
熊本大学

本日焦点を当てるのは、南部アフリカ、ナミビアのヘレロの女性が着用するロングドレス（資料２－１）です[1]。ほとんどがオーダーメイドで、ロングドレスの作り手であるドレスメーカーに体型を測定してもらい、デザインや価格を相談して作ります。親戚に作ってもらったり、自分で作る女性もいます。ロングドレスは冠婚葬祭で着用されるほか、特に年配女性によって日常的にも着られています。一方、都市で働いているヘレロ人の女性や若者層は、日常的にはジーンズ、スカート、シャツといったいわゆる洋服を着ている場合が多く、着用状況にはかなり個人差があります。なお、本日お見せする写真や映像は、表記がない場合は発表者が撮影しています。



資料２－１　ロングドレスを着たヘレロ女性
筆者撮影

ロングドレスは19世紀末、ドイツ人宣教師の妻によってヘレロ社会に導入され、縫製技術の普及とともにヘレロ女性に受容されたと言われています。資料２－２の左の写真は、1900年ごろにライニッシュ宣教団の宣教師によって撮影された写真です。キャプションには、「伝統的皮のスカートと装飾品。ただし柄の布地のスカーフと、ヨーロッパスタイルのジャケットが組み合わされている」とあります。そこから右の写真のような、本発表でロングドレスと呼ぶ女性の衣服に変化したと考えられています。向かって左前列の方がおそらく宣教師の妻や宣教団の方で、彼女たちがヘレロの人たちに裁縫を教え、このような服を着始めたということです。男性はスーツや軍服風のユニフォームを着るようになりました。



資料２－２　ヘレロの伝統的な服装とロングドレスへの変化
ナミビア国立公文書館　左：No.26942(190?)／右：No. 11444(1900年前後)

1）本報告は『ふるまいの創造――ナミビア・ヘレロ人における植民地経験と美の諸相』の第５章「四つのファッションショー――媒介される複数の世界」を中心としている。

本日はヘレロの人々の衣服の歴史性とファッションについて、ドイツ植民地支配以降の社会・文化の再編成に伴い着用され始めたロングドレスの事例からご紹介させていただきます。発表者の研究テーマとしては、①「『他者の文化』がいかに『自分たちの文化』として創造され得るのか」、②「ヘレロの人々がいかにして衣服とそのふるまいに関する規範や着こなしを確立してきたのか」、③「植民地化という歴史的経験と、衣服を着るという日常的経験がいかに交差し、衣服とそのふるまいを洗練してきたのか」、このようなことを考えてきました。

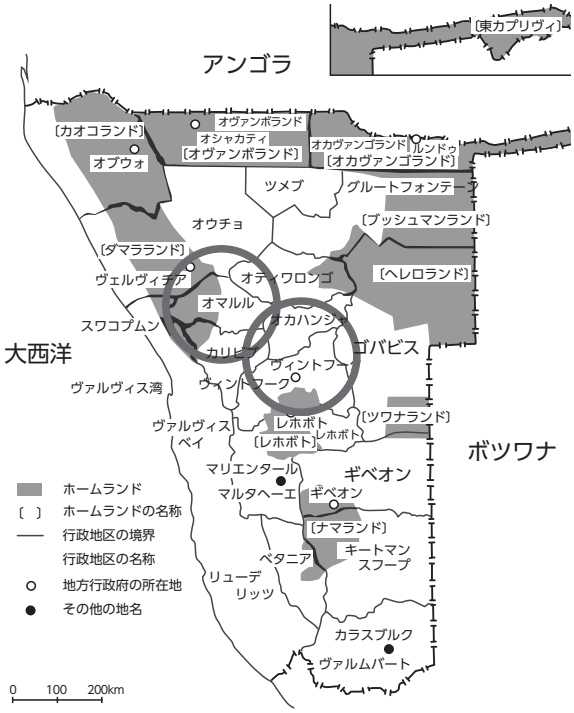
本日はその具体的な事例として、①地方のロングドレスモデリング・コンテスト、②首都のロングドレスデザイン・コンペティション、③元宗主国ドイツでのファッションショー、④首都の国際ファッションショーという４つのショーから観察されるロングドレスの多様なあり方をご紹介したいと思います。前半は発表の背景的な部分を説明して、後ほどこの４つのファッションショーの具体的事例に移ります。

ナミビアのヘレロの歴史と先行研究

ヘレロはナミビアの人口の９パーセントほどで、ナミビアでは比較的少数派です。ヘレロ語を話し、主にキリスト教徒です。同時に祖先を通じて「聖なる火」と呼ばれる火の場で神と交流する慣習も残っています。牧畜を主な生業としていますが、商店や会社で働いたり、政府職に就いたりする人も多くいます。

ナミビアでは1884年にドイツ統治が開始され、1904年から1908年にかけてドイツ植民地軍による虐殺が生じました。これによって人口の約80パーセントが死亡しました。戦いの勃発後、「ヘレロ絶滅命令」が出されています。この虐殺に関しては、現在も一部のヘレロの市民団体や、その当時ヘレロとともに虐殺の対象になったナマ人の人たちが、ドイツ政府などに対し補償訴訟を起こしていて、その訴訟もまだ解決していない状況です。

生き延びたヘレロの人たちは、強制収容所に入れられるか、周辺国やブッシュの中に逃亡するか、もしくはドイツ人農場での労働に従事しました。第一次世界大戦後は、南アフリカが侵攻して実質的な統治を開始し、ドイツにとってかわりました。この時期にヘレロは共同体の再建を図ったとされており、親族が再度集まったり、家畜を増やしたり、廃れていた慣習が復興したり、記念式典が始まったりしました。現在ヘレロ文化や伝統と呼ばれているものは、この時期に再編成されたものだと考えられます。



資料２－３　ナミビアの位置とホームランド体制下の行政区画

Republic of South Africa, “Report of the Commission of Inquiry into South West Africa Affairs 1962-1963”Pretoria, 1964を参照した［永原 1993：179］をもとに筆者作成

資料２－３がナミビアの地図です。南アに統治されていたとき、いわゆるアパルトヘイト、ホームランド体制下の行政区域を示しています。1960年代にこうした区域が設けられました。発表者は、資料２－３の丸を付けたヴィントフークとオマルルという牧畜村のあたりで、主に2009年から2012年の間に約１年滞在して調査を行いました。

ヘレロの人々は本来流動的に生活していましたが、ドイツ帝国と南ア統治により、ヘレロという部族やエスニック・グループとしてカテゴリー化、固定化されてきました。1960年代には、人々をいずれかのエスニック・グループに帰属させて、居住地域としてホームランドを割り当てる、いわゆるアパルトヘイト体制が開始されました。したがって、独立後のナミビアではエスニシティの取り扱いが問題となっており、簡単にエスニック・グループなどとは言いづらい状況にあります。人口統計では言語による指標が立てられていて、「何々語を話す人が何人いるのでこの人たちは何パーセント」という計算をしている状況です。

先行研究①植民地経験とアイデンティティ表象
――「なぜ移住者の衣服を着るのか」という問い

ヘレロに関する先行研究として、まず植民地主義の歴史とアイデンティティ表象に関するものがあります。ロングドレスは、移住者との歴史的遭遇と戦いを想起させる衣服、アイデンティティ表象として取り上げられることが多くあります。「なぜ彼女たちはドイツ人移住者の衣服を自分のアイデンティティを示す衣服として着続けているのか」、「ドイツ人移住者の軍隊様式、旗、行進、記念式典などは、ヘレロの自己表象や象徴的規範、そしてアイデンティティ構築にどう関わってきたのか」ということがよく問われてきました。

特に注目され、ほとんどのヘレロ研究者に取り上げられるのが、ヘレロ語で「オクヤンベラ(*okuyambera*)」と呼ばれる記念式典です。オクヤンベラ本来の意味は簡単に言うと「墓参り」で、ここでは偉大な歴史的統率者[2)]や祖先の墓地への巡礼のことを表しています。先述したように、1904年の虐殺から生き延びたヘレロの人たちは各地に散らばっていました。その後1923年に、亡命先のボツワナで客死した最高首長サミュエル・マハレロの遺体がナミビアに送還され、彼の祖父と父が眠るオカハンジャという地域の墓地に埋葬されました。そのとき多くのヘレロの人たちが、この埋葬の場に集合しました。虐殺後初めてのことです。この墓地への巡礼がその後形式化して、年に１度の記念式典としてヘレロ社会に定着します。

この記念式典で、男性は軍服風のユニフォーム、女性はロングドレスを着用しています。資料２－４上写真の右側に見えるのが女性です。式典の参列者たちは、サミュエル・マハレロの色として伝わる赤を軍服やドレスに取り入れ、自分がマハレロ一族の民であることを表すようになりました。ナミビア各地で年に１度、週末の３日間、マハレロだけではなく他の統率者やチーフが亡くなった日に集まり、その墓に向かって行進します。

現在ナミビア政府公認の伝統的権威として、７人ほどの公的に認可されたチーフ[3)]が存在しています。その他、公的に認められていない自称チーフも複数存在していて、ヘレロ社会には複数のチーフが並列している状況です。

資料２－４　記念式典「オクヤンベラ」(墓参り)
2009年、オカハンジャ、旗隊の墓地への行進

ヘレロの人たちは、普段は墓地に近づくことは許されていませんが、この式典の際には墓地に入ることができ、チーフから顔に水を吹きかけられる祝福を受け、ドイツ植民地軍との戦いの歴史やチーフたちの逸話のスピーチがなされ、それが国営ラジオのヘレロ語チャンネルで中継されます。

資料２－４で行進をしている人たちは模擬軍隊組織(troop)で、現地語では「オテュルパ」、単純に旗隊を意味する「フラッグ」とも呼ばれます。このヘレロの旗隊は、ドイツ植民地軍の組織構造をモデルとしながら発展してきたとされます。男性の成員は軍服のユニフォームを着用し、成員間に総督や大佐といった階級を設けています。見かけは軍事的ですが、制服を着て行われた訓練はむしろ娯楽なものであると言われています。旗隊は式典の際に旗を掲げて墓地まで行進するだけでなく、寡婦の生活や葬式の補助などを行う自治的な補助ネットワークであるとして理解されてきました。

ヘレロの人々は、ドイツ人移住者や植民者の衣服を取り入れ、移住者の着こなしを学んできましたが、ドイツ人が着ていた服をそのまま着用してきたわけではないところに特徴があります。それぞれの一族の歴史的な統率者やチーフを象徴する色を組み合わ

2) 人々自身によって慣習的に支持され認められていたのか、植民地政府当局によって認可されていたのかを問わず、ヘレロを実質的に統率していた者を広く指し「統率者」の語を用いる。

3) ナミビアでは、1995年に制定された「伝統的権威法」(Traditional Authorities Act)で定められた「伝統的指導者」(Traditional Leader)が、「伝統的コミュニティ」の文化的指導者として政府に認可されている。

資料２－５　移住者からの着こなしの学びと各統率者や「チーフ」を象徴する色の組み合わせ

左から、白、赤、緑のドレスと旗

資料２－６　普段着〈左〉と式典用の白のロングドレス〈右〉

せ、旗隊としての行進の仕方や着こなしといった式典でのふるまいを整え、養ってきました。資料２－５に示したのが、統率者やチーフを象徴する３色を取り入れた衣装です。各ヘレロ人がどの人物をチーフとするかによって、それぞれ赤（マハレロの一族）、白（ゼラエウアの一族）、緑（ングヴァウヴァの一族）のいずれかに属しています。

記念式典や葬儀からは、移住者との接触以前にはなかった衣服とふるまいを取り込み、統率者やチーフと大きく関わるかたちで独自に形式化し、集団内の差異の可視化を行いつつ、ヘレロの集団としての文化的感覚の再生産及び自己形成を行ってきたことがわかります。行進、祝福の儀礼、戦争を再現したような歌や踊りといったふるまいが毎年記念式典で反復され、それがヘレロとしてのふるまいとして身体化されています。この点は本ワークショップでも着目されている規範の部分に関することだと考えられます。

資料２－６の左の写真は女性のロングドレスの普段着で、式典やチーフの葬儀に参加する際は右写真のような式典用ロングドレスに着替えています。式典用のロングドレスでは黒いジャケットが重視されていて、このジャケットは記念式典や葬式の場でのみ着用されます。ジャケットの着用は祖先への敬意を表すとされており、他の場で着回すことは禁じられています。この記念式典がヘレロ研究ではかなり注目されてきました。

先行研究②日常的感覚への着目
――「いかに入手し、どう着るのか」という視点

ヘレロに関する先行研究の第二のアプローチとして、日常的感覚への着目があります。実際に私が現地で暮らしてみると、当たり前ですが、第一のアプローチにおける問いが、日常では重視されないことがわ

No.20190　19世紀末

No. 27438　1950年代Windhoek

No.20590　1984年

ヘレロ女性私物　1997年頃

2012年筆者撮影

資料２－７　オシカイヴァの変遷

かってきました。ヘレロの生活で求められたことはむしろ、ロングドレスの種類や着方、入手法、布の選び方、作り方、着こなしといったふるまいを、自分自身も学習し身につけなければならないということでした。ヘレロの人々と暮らすには、「なぜ着るのか」ではなく「いかに着るのか」が重要になりました。

ここで、アフリカのファッションについて研究を行う人類学者のカレン・トランバーグ・ハンセン（Karen Tranberg Hansen）が着目していた「衣服能力（clothing competence）」、あるいはファッション性に着目することができるのではないかと考えました［Hansen 2004］。ハンセンは「衣服能力というのは、着飾られた身体の披露とふるまいのなかでトータルルックを生産するために提示され、その成功と失敗の可能性はコンテクストに依存する」と述べており、衣服能力を「TPOや文化的背景に合ったトータルルックを自らの身体で提示するための力」という意味で用いています。

またハンセンは「民族衣装」に代わる語として「ドレス」という語を用いており、報告者もそれにならっています。このドレスは、衣服と衣服に合わせるアクセサリーや帽子などを含むコーディネート一式を指します。一般に浸透している民族衣装という語は、出自、習慣、言語等を共有する特定の民族のみが着用してきた不変の固定的な衣服を連想させますが、ロングドレスの着用者であり、ここでヘレロと呼ぶ人々のエスニシティは、他者との相互行為によって変化する動的なものであるうえに、本来流動的だった人々がヘレロという部族やエスニック・グループとして入植者によってカテゴリー化されてきたという歴史があります。ヘレロが着るロングドレスもまた、彼女たちのエスニシティと同じく固定的ではありませんでした。西洋や日本の衣服と同様に、ロングドレスにも流行があり、デザイン、素材、色に関する好みは変化しています。

ハンセンの研究は、西洋の衣服のみが想定されがちなファッションを、全世界的な動向として位置付け直したという点で重要だと考えています。どこで暮らしていてもどのような服を着ていても、流行は存在し、ファッションであり得ます。特にアフリカでは、「伝統的／現代的」、「アフリカの／西欧の」、「ローカルな／グローバルな」という二項対立が問題視されますが、それはやはりヘレロのロングドレスにも当てはまりませんでした。報告者は、これをどう考えればいいのかについて研究してきました。

ヘレロのロングドレスでは、水平に伸びた牛の角を模していると言われる「オシカイヴァ（*otjikaiva*）というかぶりものが特徴的で、現在では「これがないとヘレロのロングドレスじゃないよね」と言われます。しかし、これも実は資料２－７の左上の写真のように19世紀末にはなくて、徐々に横に伸びてきたことがアーカイブの写真調査からわかりました。オシカイヴァも変化してきていて、ここ100年ほどで整ってきた新しいものと言うことができます。

４つのショーにみるロングドレスとふるまい

ここからは、４つのショーから見えてきた異なるロングドレスとそのふるまいを紹介しながら、ヘレロがどのようなロングドレスやふるまいを「美」とみなしているのかについて考えてみます。

ファッションショーやビューティーコンテストは、女性や男性に対する単一の理想像をつくり出し、そのイメージを再生産する場であるとされてきました。しかしロングドレスのファッションショーには、ショーごとに異なる審査基準と求められる適切なふるまいがあり、単一の理想像ではなく、複数の像が観察されました。

地方のロングドレス着用モデリング・コンテスト――牧畜民的ふるまい

まず地方の農村部であるエプキロという地区で開催されたロングドレス着用のモデリング・コンテストを取り上げます。エプキロは、アパルトヘイト時代にヘレロの居住地として、多くのヘレロが強制移住された牧畜が極めて盛んな地域です。発表者は審査員として招聘された当時19歳の人気デザイナーであるマクブライトと、モデルとして参加したカペナという42歳の女性に同行し、コンテストを調査しました。

当時ヘレロの人々はナミビア各地で、小規模のロングドレス・コンテストを開催していました。このときの参加者は30歳代から40歳代のモデル８名、審査基準は「笑顔」、「外見」、「性格」、「ドレス」、「舞台でのパフォーマンス」でした。

資料２－８の上写真がカペナとマクブライトで、部屋でドレスの準備をしているところです。上から２番目の写真は審査員が審査をしているところ、３番目の写真が観客、一番下が舞台上のモデルたちです。

このモデリングで特徴的だったのが、「ウシのように歩く」というヘレロ独特のウォーキングです。前方をまっすぐ見据えて、直線的に早足で歩く西洋的なファッションショーのウォーキングとはまったく異なっているウォーキングが行われていました。日常においても、「ロングドレスを着用したヘレロ女性は、決して走ったり、急いで歩いたりしてはならず、一歩ずつゆっくり歩を進めなければならない」とされています。モデリングでは、ウシのように歩くウォーキングがパフォーマンスとしてより定型化され、優美さの基準となり、審査対象となっていました。

資料２－８　地方のコンテスト〈2012年〉

このウォーキングを見て、実際その場にいた私は、ちょっとポカーンとしてしまいまして、どの人がいいのかもまったくわからない状況でした。しかもモデルというと10歳代から20歳代の若者を想像していたので、30歳代から40歳代の大柄な女性がモデルとして参加していたことに違和感を抱き、それをカペナにたずねてみました。すると、「この歩き方は若い子にはできないからだ」という返答が返ってきま

した。このコンテストでは、単に若い、表面的な美しさではなく、ヘレロ女性としての成熟度や熟練度が試されていたと言うことができます。

「ヘレロらしい」豊満な肉体が一つの審美的な基準になっていて、腰回りもペチコートを３枚から７枚重ねて、わざと膨らませています。この点も、やせ型のモデルが標準とされる西洋のショーとは大きく異なっていました。

首都のロングドレス・デザイン・コンペティション――流行デザインの希求と革新

二つ目として、首都で開催された「レジェンダリードレス・デザイナーズ」コンペティション＆ガラディナーを見てみます。2005年から2012年にわたって、年１回開催されてきました。私が調査した2012年の開催を最後に開かれていないそうです。

組織者はヘレロの男女約20名で、コンペの企画運営を行っています。この方たちは主にエリートの富裕層でした。組織者の目的は、①ロングドレス・デザインの現代化、②ロングドレスの販売促進、③草の根デザイナーの社会経済的後押し、④ロングドレスの魅力をヘレロ社会内外に発信することです。率直な欲求として、「私たちの素晴らしいドレスをランウェイで見せたい」、「ドレスの魅力を人々に知らしめたい」ということがよく語られていました。資料２－９がコンペの写真です。

エミィ・シランバという大学の講師をしている組織者に話を聞くと、「私たちはオホロクェバ（＝ドレス）が大好きなのよ。オホロクェバを守っていきたいし、生きたまま、おもしろいままにしておきたいの。もしドレスを新しいファッションと混ぜたら、それを着ない人はいないでしょ。デザイナーは揃っているから、美しい素材を手に入れさえすればヘレロドレスにファッションを持ち込めるの」と語っています。

また、首相官邸に勤務していた別の組織者は、それぞれの年でテーマが決められており、ある年には色のタブーへの挑戦を行ったと語っています。「ヘレロの女性が黒を着ることはタブーです。……中略……（自分自身は）夫のことはまったく考えずにオフィスに黒のスーツを着てくることもあるのよ。……西洋諸国では黒や白のドレスを〔特別なとき以外にも〕着ることができるわよね」ということで、ヘレロ社会における色のタブーについて考えたかったとインタビューで話していました。そして通常は花嫁が着る

資料２－９　首都で開催された「レジェンダリードレス・デザイナーズ」コンペティション＆ガラディナー〈2012年〉

資料２－10　「レジェンダリードレス・デザイナーズ」コンペティション＆ガラディナーのチケット

白のドレスも、他の場所で着ることもできるようなデザインに仕立ててもいいのではないかと語っていました。

組織者が成し遂げたことは、若者にも魅力が伝わるように、ロングドレスを現代化しながら新しい流行を生み出し、その存在と魅力を示すことでした。それによって、ヘレロ女性が楽しみながらヘレロ文化を継承することができるのではないかと言っていました。デザイン力のあるドレスメーカーの意識と技能の底上げ、知名度アップが確実に行われたのではないかとも語られていました。

ヘレロのロングドレスを作る人は、首都だけでも100人から200人いると言われており、かなりの数がいます。ヘレロ女性のデザインへの欲求と購買欲を刺激して、従来のロングドレスの規範への挑戦を行ったと言えます。そして国内におけるロングドレスの存在感をアップさせたと考えられます。

一方で、コンペという競うやり方に批判的なドレ

スメーカーの人もいます。「そんなことはやっていられない。こっちはお金のないなかで一所懸命に毎日服を作っているんだ」ということで、コンペ参加のデザイナーとかなり温度差が見られました。顧客の要望がコンペティションによって過熱した部分もあって、デザイナーに対するデザイン力向上の要求が高まり過ぎて、その後デザイナーをやめてしまった人もいました。

とはいえ、組織者とデザイナーの尽力によって、レジェンダリー・コンペティションは知名度を上げていき、ロングドレスがナミビアの特産品として紹介されるに至ります。

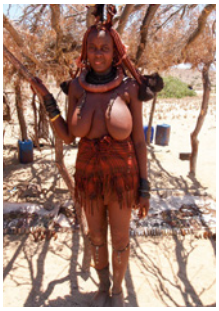
元宗主国ドイツでのファッションショー ―― 起源との再遭遇

2010年、ナミビアの貿易産業省は、ナミビア独立20周年およびドイツ－ナミビアの貿易関係10周年を祝うトレードフェアと祝賀会を開催しました。会では他のナミビア特産品とともに、ロングドレスが取り上げられショーが行われました。

ここでヘレロの人たちは、ナミビアのローカルな特産品として最先端のロングドレスを発表しました。彼女たちとしては「自分たちのファッションを見せつけてやる」という意気込みでしたが、ドイツ側は当時のドイツ風ドレスと現在の最新のロングドレスを並べて歩かせるという出し物を演出しました。これはファッションと歴史を併置するという発想で行われたのではないかと考えられます。

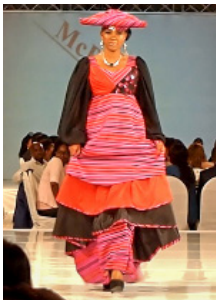
このショーについて、組織者のインゲは、「ドイツ人が行ったショーでは、すごく素敵なオレンジのドイツ風ドレスをドイツ人モデルが着ていたの。……中略……その姿はまさに〔ロングドレスの起源とされる〕「ヴィクトリア風ドレス」だったわ。それから彼らは……中略……ヘレロにふさわしい体つきをした〔ヘレロ〕女性を登場させて、そのドイツ人女性と一緒に歩かせたのよ。これは……私は泣いてしまったわ。本当に素敵だったから」と語っていました。

解釈が難しいですが、現在でも虐殺に関する補償訴訟が続いていて、歴史的経緯から一般論としてヘレロがドイツ人に負の感情を抱いている部分はあります。しかしこのときは、ランウェイ上で時間と空間、美意識を共有したことによって、両者の間にファッションや美を媒介とした共通感覚が築かれ、そこに感動が生まれたと考えられるのではないかと思います。

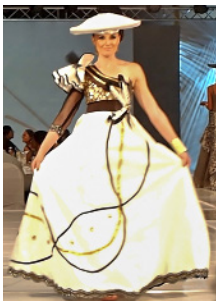

ヒンバの一般女性〈2012〉

マクブライトのドレス〈2012〉

オバンボの一般女性〈2010〉


マクブライトのドレス〈2012〉

ヘレロの一般女性〈2012〉


マクブライトのドレス〈2012〉

資料２－11　第１回ナミビア・ファッションショーで見られたナミビア内の民族集団の衣装をアレンジしたデザイン〈2012年〉

首都の国際ファッションショー ――ナミビアの「ローカル」ファッション

最後に、首都で開催された第１回ナミビア・ファッションショーを紹介します。これは国際的なファッションショーで、当時テレビ・コマーシャルがナミビアで全国的に流れていました。参加者はアフリカ各国のデザイナーが６名、ナミビアからは５名です。先ほど紹介したヘレロ人デザイナーのマクブライトも出場しています。

目的は、ナミビア国内で活動するデザイナーたちに国際的活動の基盤を与えることでした。マクブライトのドレスには、ナミビア国内の複数の民族の衣服をデザインに取り入れるよう開催委員から要請があったということです。資料２－11に写真で示したような、ナミビア内の他の民族集団、ヒンバやオバンボの衣服をアレンジしたようなロングドレスやドレ

スが作られ、発表されていました。他のナミビアのデザイナーは、いわゆる洋服、西洋的なデザインのものを発表していましたが、マクブライトに関しては、ナミビアのローカルファッション代表としての役割が求められていました。それに応えたということで、「優雅な伝統と現代的衣装の融合」と新聞各紙で報道され高い評価を得ました。

一つは、ヘレロ固有の衣服がナミビアの衣装としてグローバルな舞台へ出ていく可能性があるのではないかと思います。単にローカルでもグローバルでもなく、その間でロングドレスを創り続けることが、新しく、さらに固有なロングドレスというエスニックドレスの形と道を決定していくのかもしれません。

ロングドレスをめぐる複数の原理

本日の報告では、ロングドレスをめぐって複数の原理があることを示しました。一つは歴史性です。特にドイツ植民地主義の影響によって、ドイツ人移住者との関係のなかで衣服が着られるようになってきました。二つ目が記念式典です。ここでは祖先やチーフとの関係と色が衣服に直接的に関わっていました。三つ目が規範です。どんなロングドレスを、どのように、いかなる場所で着るのか。四つ目の原理がファッションで、都会的美意識と美への欲求、新たなデザインという部分があります。

ヘレロの人たちのあいだには、①戦争の経験（歴史）、②祖先やチーフとの関係（信仰と政治）、③牧畜（生業）との関係、④儀礼や日常的着こなしのなかで培われた規範が存在します。これはそもそも植民地主義をどう捉えるかという問題にも関係しますが、グローバルな部分とローカルな部分とが組み合わさった領域だと考えます。ロングドレスの美とふるまいは、ヘレロ自身の新旧の価値観、ヘレロとドイツ人、ヘレロとその他のナミビア人といった集団的他者との関係のなかで多様なかたちで発現してきました。これはナショナル＋グローバルという視点で考えることができると思います。

美やロングドレスの形状、価値自体もそのときどきに対峙する他者とのやりとりのなかで強化され、創り直され、調整され、生成されてきたのではないでしょうか。

最後に鷲田清一の議論を参照して考えます。「どうすれば西洋人のロングドレスをヘレロ女性の体に美しくフィットさせることができるのか」、そして「どのデザインならヘレロのドレスとして許容され、どこまでいくとヘレロのドレスでなくなるのか」を、ヘレロの人たちは自らの体で確認してきたのではないかと考えています。

そうだとすると、ロングドレスのファッションは、ロングドレスのふるまいをいかに理解し、模倣し、習得しながら、いかに着崩すのかという実践だとも言えます。ロングドレス・ファッションは、ヘレロ女性であることを着用者に強く感じさせると同時に、世界中のファッションと積極的につながろうとしています。それは「ヘレロ女性らしさ」とは何かを着用者に考えさせながら、誰も見たことがないスタイルをつくり出す刺激をヘレロの人々に与えていると思います。

参考・参照文献

永原陽子（1993）「『国民的和解』の実験――ナミビアの独立」林晃史編『南部アフリカ諸国の民主化』pp. 165–208、アジア経済研究所

鷲田清一（2013［2005］）『ちぐはぐな身体――ファッションって何？』（ちくま文庫）筑摩書房

Durham, D. (1999) “The Predicament of Dress: Polyvalencyand the Ironies of Cultural Identity,” *American Ethnologist*, 26(2), pp. 389-411.

Gewald, J-B. (1998) “Herero Annual Parades: Commemorating to Create,” In Klei, J. V. d. (ed.), *Proceedings CERES/CNWA Summer School 1994*, Utrecht: CERES.

Gewald, J-B. (1999) *Herero Heroes: A Socio-Political History of the Herero of Namibia, 1890-1923*, Oxford: James Currey.

Gewald, J-B. (2000) *We Thought We Would Be Free: Socio-Cultural Aspects of Herero History in Namibia 1915-1940*, Cologne: RüdigerKöppeVerlag.

Hansen, K. T. (2004) “The World in Dress: Anthropological Perspectives on Clothing, Fashion, and Culture,” *Annual Review of Anthropology*, 33, pp. 369-392.

Hansen, K. T. (2013) “Introduction,” In Adrover, L., Bastian, M. D., Bennetta, J.-R. & Hansen, K. T. (eds), *African Dress: Fashion, Agency, Performance*, London: Bloomsbury Academic, pp. 1-11.

Hendrickson, H. (1994) “The ‘Long’ Dress and the Construction of Herero Identities in Southern Africa,” *African Studies*, 53 (2), pp. 25-54.

Hendrickson, H. (1996) “Bodies and Flags: The representation of Herero identity in colonial Namibia,” In Hendrickson, H. (ed.), *Clothing and Difference: Embodied Identities in Colonial and Post-Colonial Africa*, Durham and NC: Duke University Press, pp. 213-244.

Wallace, M. (2003) “ ‘Making Tradition’: Healing, History and Ethnic Identity among Otjiherero-Speakers in Namibia, c. 1850-1950,” *Journal of Southern African Studies*, 29 (2), pp. 355-372.

Werner, W. (1990) “ ‘Playing Soldiers’: The TruppenspielerMovement among the Herero of Namibia, 1915 to ca.1945,” *Journal of Southern Africa Studies*, 16 (3), pp. 476-502.

■質疑応答

帯谷知可（司会）　ありがとうございました。事実関係に関する質問等ありましたら、どうぞ。

後藤絵美　ヘレロの方々にとって、露出してはいけない部分、隠すべき部分というのが、規範としてあるのですか。それはどう変わってきていますか。もともとはかなり露出されていたのに、現在ではロングドレスになって、ほとんど足を出さないですよね。足を出すことは問題がないのでしょうか。

香室結美　近年、ヒンバの方たちが日本のテレビ番組でも取り上げられています。皮の衣装を着て、上半身は裸で、女性だと皮のスカートを穿いて、体に赤土とバターを混ぜたようなものを塗っています。ヘレロの人たちも、かつてはヒンバの人たちと同じような格好で、上半身も裸で過ごしていました。ロングドレスが入ってきてからは、足を出してはいけない、手も手首の少し上あたりぐらいまで、ということになりました。胸の谷間は強調していることがありますが、確実に露出をしないようにはなっています。

昔の衣装についてどう思うかを聞いたこともありますが、「いまではもう無理」という返答がかなりあります。ただし、「昔の自分たちの格好、現代のヒンバの人たちがしているような格好を見たら美しいとは思う。自分たちの起源でもあるし、美しいとは思うけれども、自分たちはいま胸を出すのはやっぱり恥ずかしい、それは無理だ」と言っていました。

ファッションショーでは、ノースリーブだったり片腕を出したりしていますが、若者は比較的許容していて、そういったファッションをデザインとして楽しむ部分はあります。しかし、高齢の方たちに聞くと、「これはちょっとないね、腕は出しちゃだめだよ」という話がありまして、そこは若年層と年齢高めの女性たちとのあいだでの規範のぶつかりがいがあると思います。

杉本星子　一つ確認ですが、この民族衣装の名称を「ロングドレス」と呼んでおられますが、現地でも「ロングドレス」と言われていますか。これは英語ですよね。大元の起源がドイツとの関係であるとしても、第一次大戦後ぐらいから式典で着られるようになったという背景もあって、南アフリカの支配下で名称として固定したのかどうかというのが一つ目の質問です。

もう一つは素材についてです。見ていると式典で着られているものは無地が多く、普段着はプリントでした。今日の報告には出てきませんでしたが、ご著書のなかでは、コンペティションでインド風のペイズリー柄が流行ったとも書かれていました。素材がどこで作られたものか、輸入品なのか、現地で生産しているのか教えてください。

香室　現地語では、英語でいう「ドレス」、一般的に言うワンピースのようなものをを「オホロクェバ」と言います。「オホロクェバ・ヨシヘレロ」と言えば「ヘレロのドレス」という意味で、「オホロクェバ・オンデ」と言えば――「オンデ」は「長い」という意味なので――「長いドレス」、「ロングドレス」です。現地語ではそう言われたら、それがヘレロのドレスを示していることがわかります。

杉本　現代のファッションショーのなかでも、そのヘレロの言葉で呼ばれますか。

香室　現在のヘレロの公用語は英語ですが、現地の人は「ヘレロ・ドレス」と呼ぶことが多いです。研究上も「ヘレロ・ドレス」でもいいのですが、研究者の間では「ヘレロ・ドレス」と言うことでドレスを固定してしまうのではないかという批判や議論もあるので、研究上は私も「ロングドレス」と呼んでいます。現地の人たちも「長いドレス」と言っているので問題ないと考えています。

杉本　問題があるというわけではなくて、ナショナルな枠組みのなかでエスニックドレスになってい

くときに、たとえばインドでも、「サリー」に相当する言葉は現地でいろいろありましたが、それが「サリー」に統一されていきます。このような事態はファッションには常に起こり得ると考えたので、そこを確認したいと思いました。

香室　素材は、普段着については主に綿です。ヘレロの人たちは牧畜民なので、もともと自分たちで布を織ることはしません。基本的には輸入品です。南アフリカや中国からの輸入品があります。チャイナタウンがナミビアにもあるので、そこで安いものを買って使うことが多いです。あとはタフタ、レースなどのナイロン生地、ポリエステルが、現在の特にハイファッションには使われています。

安城寿子　首都のレジェンダリードレス・コンペティションは流行を創出することを意図しているとのお話でした。流行というのは、流行色などある程度は欧米のトレンドの影響があると考えられますが、そういうものを意識して取り入れているのか、それともまったく欧米のトレンドとは関係なく、独自の流行を創出しようとするものなのか、教えていただけたらと思います。

香室　そのあたりについてはもう少し調査が必要だと思っています。日常的に雑誌やローカルテレビ、ケーブルテレビなどで世界中の映像が入ってきているので、そういうものを見て、セレブのファッションを意識している人もいます。たとえば先ほど取り上げていたチケットに、アンジェリーナ・ジョリーの写真がヘレロの女性と合成されていましたが、アカデミー賞などでセレブが何を着ているのかを意識している人もいるのでしょう。西洋の最先端のファッションをロングドレスに融合させてみて、それがヘレロの人たちのなかで何が流行るかにつながるのだと思います。

先ほど話が出たペイズリー柄も、１人のデザイナーが、とてもすてきなペイズリー柄のドレスをレジェンダリードレス・コンペティションで発表して、そのときのモデルが額に赤いビンディーを付けていたのですが、それが一部の若いヘレロの女性のあいだで流行りました。ビンディーを付けている人がやたらいるなと思ったら、「去年そのドレスが流行ったんだ」ということで、こうした流行が生み出されているようです。

報告３

唯物論の神は イスラームグッズを祝福し給う

世界の工場 中国の経験を垣間見る

松本 ますみ

室蘭工業大学

私の報告は、先のお２人のような、かっちりとした文化人類学的な研究ではありません。漢語で言う「走馬看花」――馬に乗って花を見るという感じで、実際に見てきたこととネット上で見えていることを総合してお話ししたいと思います。

中国共産党と宗教とのこじれた関係

旧社会主義圏の研究をしている方であればみなさんよくご存じだと思いますが、ソビエト連邦は無神論でした。社会主義政権は神を信じることが推奨されないことになっています。ソ連崩壊後、旧ソ連の国々はそれに対してさまざまな宗教復興策を練っていることも、みなさんご存じかと思います。

中国は1949年の革命以来、無神論が国是の、唯物論の国家です。憲法の前文には「国の根本的任務は、中国的特色を有する社会主義という道に沿って、力を集中して社会主義現代化の建設をする事にある」とあって、社会主義に「中国的特色」があるという冠詞が付いています。さらに、「中国の各人民は、中国共産党の指導の下に、マルクス・レーニン主義、毛沢東思想、鄧小平理論及び三つの代表の重要思想に導かれ、人民民主主義独裁を堅持し、社会主義の道を堅持し、改革開放を堅持する」とあります。これはつまり三権分立がないということです。私たち自由主義陣営の人たちは「三権分立は当たり前ですね」と思いますがそうではなく、この司法、行政、立法という三権はすべて中国共産党の下にあるわけです。また、「人民の敵には権利がない」という法理論があるので、「天賦人権論」は認められません。ここが肝です。

無制限の信教の自由がない中国

したがって、無制限の信教の自由はございません。もともと「宗教はアヘンである」というマルクスとエンゲルスの考え方がありますので、潜在的に危険な勢力であるとして監視下に置かれ、中国共産党の指導の下に置かれてきたことになります。

指導者によってかなり違いますが、たとえば毛沢東時代の1958年から数年間と、1966年から10年続いた文化大革命、このころには厳しい「弾圧」と言ってもいいような対応がありました。改革開放以降は、規制がないわけではありませんが、ゆるやかになってきました。ところが2015年から「宗教中国化」という方針が発動され、再び厳しい政策の下に置かれていることは、頭の隅に置いていただければと思います。

なぜ中国共産党はこれほどキリスト教、イスラームなど宗教が嫌いなのか。その理由の一つに、国共内戦の相手である国民党が、キリスト教、とくにアメリカのプロテスタントとの強い結びつきがあったことが挙げられます。これに対する報復措置として、キリスト教の宣教師が全員国外退去になりました。そして中国人だけの三自愛国教会がつくられたという経緯もあります。

第二に、世界史を勉強するとわかりますが、中国の政権が倒れるときには、多くの場合が宗教と結びついています。ですから、宗教の大きな動員力に恐れをなしているということもよく指摘されています。第三に、進化論のような考え方が強く、「無神論は科学的で進歩的で文明的である。宗教はアヘンで迷信に近く、愚昧で消滅すべき」という体制派知識人がいて、「宗教は消滅すべきだ」という政府の路線が学問的に正当化されていると言えるかと思います。

特にひどかったのがチベット動乱に連動した1958年の「宗教制度的民主改革」と、悪名高い文化大革命です。このときは「宗教は階級問題」と言われ、階級敵の消滅を目指しました。多くの宗教勢力、特に宗教指導者が階級敵として粛清されていきました。その正確な数はまだ統計がありません。現在の習近平政権もその考え方を原理主義的に継承していると言ってもよいかと思います。

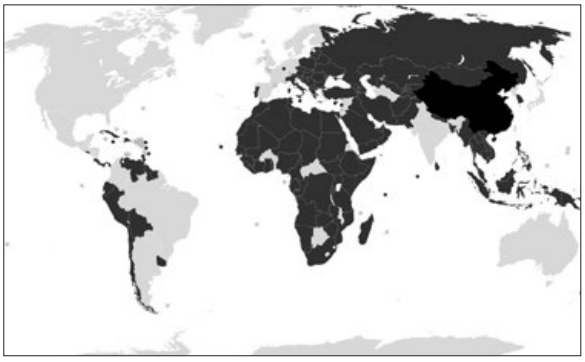
チベット、新疆ウイグル、モンゴルでの弾圧

宗教は中国の民族問題と絡んでいるとともに、人権問題とも絡んでいることを、みなさん常識的にご存じだと思います。たとえばクリントン政権のときには、チベットの人権問題に対する批判が出ました。そのときは中国側が「米国政権の内政干渉だ。体制転覆の陰謀である」と主張して、両国の関係がぎくしゃくしたことも記憶に新しいかと思います。習近平政権ができて２年後からは「宗教中国化」が始まり、現在に至るまで続いています。

なぜ習近平がそんなことをするのかを調べてみますと、いま言ったことに加えて、自由、平等、民主、人権という西欧思想――普遍的価値とよく言いますが、こういうものが大嫌いなので、それに対して排斥する態度をいつも取っていると言えます。そしてもう少しややこしいのが、宗教を信じる人の多いムスリムやチベット仏教の信者である少数民族は、全人口の８パーセントしかいないのに、民族区域自治の面積は64.3パーセントと中国の大きな面積を占めるということです。少数民族がある宗教を信じてある地域に集まって住んでいることで、中国共産党にとっては都合の悪いことが起き得ると考えていると言えます。

チベットにおいては、ダライ・ラマ14世の亡命、チベット騒乱、ダライラマのノーベル平和賞、その後現在に至るまで抗議の焼身自殺が起こっている状況で、宗教が厳しく締め付けられています。また、新疆ウイグル自治区の問題は、ここ数年メディアでとり上げられ、国際問題にまで進展しています。もともと「新疆」は「新しい土地」という意味ですので、あまり中国文化が入ってこなかったところです。本格的に「中国化」したのは、やはり改革開放後と言えるかと思います。漢族と人口の割合が逆転し、先住民族のウイグル人はいい仕事がもらえない、あるいは差別をされ、結果的にウルムチ駅事件、昆明駅事件などが発生しました。そしてこれに対する対抗措置だと私は考えていますが、現在にまで続くコンセントレーション・キャンプの問題が、2017年ごろから起こっていると報道されています。つい数日前（2021年2月2日）には、コンセントレーション・キャンプで女性たちが夜な夜なレイプをされているというショッキングなBBCのレポートもありました。

内モンゴル問題も記憶に新しいところです。2020年９月の新学期からモンゴル語の教育が禁止になり、すべて漢語にしてしまったという多文化主義を大事にする世界の動きとは逆行するようなことが起こっています。



資料３－１　一帯一路に参加の国
出典：Green Belt and Road Initiative Center
〈https://green-bri.org〉から筆者作成

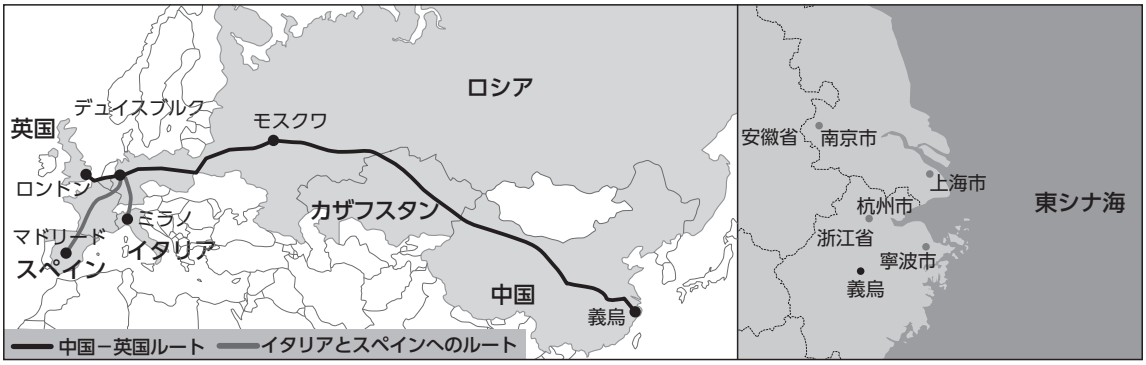
改革開放＝対外開放から一帯一路へ

中国の改革開放は1979年から始まり、対外開放が始まりました。もう10年も前ですが日本のGDPを超えて、現在では３倍になっています。そのなかで、一帯一路（Belt and Road Initiative）が2013年に発動されました。これまでは世界の工場として輸出志向型の産業を維持して成長してきましたが、逆に内需充実へシフトしてきました。そして、現在は義烏からマドリード、ミラノ、ロンドンへ鉄路コンテナがどんどん走っています。これは新疆ウイグル自治区を通っていきますので、中央アジア諸国も――嫌な言葉ですが――中国側としては手なずけておく必要があるというルートでもあります。

それから中国側のいろいろな戦略本を読んでみますと、サプライチェーンが世界中にありますが、それで世界で圧倒的優位に立ちたいようです。これまでは部品だけを作ったり、自国ブランドがあまりブランド力がなかったりしたわけですが、これからはハイエンド製品を作っていく。５Gやファーウェイが思い浮かぶと思いますが、収益型のＩＴに関しては、世界最先端を売っていきたいというのが中国の方針です。

そして、製品（ハード）の輸出はOKで、たとえば今日取り上げるイスラームグッズに関しては出すのはOKですが、思想、ものの考え方の輸入はだめです。民主の考え方、自由の考え方もだめです。特に宗教関連はもっとだめだということです。

資料３－１で濃いグレーに塗っているのが一帯一路に参加している国々です。世界の面積の半分以上をカバーしていることがおわかりかと思います。



資料３－２　義烏の位置とマドリードまでのルート

出典：http://www.xinhuanet.com/english/2020-07/07c_139195088.htmから筆者作成

資料３－３　メイド・イン・チャイナの品々

筆者撮影

回族の創業家の存在と義烏という創業家精神のまち――2000年代

私は義烏に３回ほど調査に行きました。約10年前なので、現在ではかなり変わったかと思いますが、本日の発表に向けていろいろイスラームグッズを買ってみました。みな義烏から来ていましたので、まだ義烏がイスラームグッズの集積地であることは変わらないだろうということでお話をしていきます。

義烏は中国の沿海部ですが、海には面しておらず、内陸港と呼ばれています（資料３－２）。2019年から、この義烏からマドリードまでの大陸横断鉄道が動くようになりました。約18日間かけて、大量のコンテナ荷物がヨーロッパに向けて運ばれます。

2020年７月の段階で、半年間でマドリードまで１万1,220コンテナが運ばれました。さまざまなインターネットの記事を見ながら、これはコロナに打ち勝つグリーンラインではないかと考えていました。特に注目すべきなのが、中国郵政の専用ラインができていることです。この発表に合わせてアリババでグッズを購入してみましたが、すべて中国郵政で届きました。ということは、これはアリババ路線とも言えるのかなと思います。

興味のある方は、AliExpressというアプリをダウンロードしてみていただきたいのですが、配送に何日かかるかが出ています。日本は近いので発注から３週間未満で来ます。ワルシャワまでは鉄路12日、ハンブルグまでは15日ですので、陸路ですと前後の通関を入れても30日かからずに、さまざまなものが中国から世界の消費者のもとに届けられていることがわかります。費用的にも、現在は船便の２倍ぐらいですが、航空便の半額ですむ。海路に比べると時間は半分ぐらいの縮小になるという、いいことずくめの陸路の鉄道です。

義烏は日本の方にはあまりなじみがない場所かもしれませんが、マーケティング関係の方には知られた場所です。私が訪れた当時の義烏は「100円ショップのふるさと」と呼ばれていました。お店で買い物をするとついてくるショップバッグを作っている工場で日本向けの製品を見て、帰国してから実際に日本の某100円ショップで同じものを見つけて驚いたことがありました。

見ればわかると思いますが義烏は内陸です。陸路の鉄道ができる前は、寧波に集めて、コンテナに詰めて海外に出荷していましたが、現在は大陸の中であれば鉄路で行くという時代になっています。

資料３－３はみなMade in Chinaで、2007年に行ったときの写真です。イスラーム諸国に留学した

資料３－４　コンテナ
筆者撮影

資料３－５　中央アジア向けと思われる衣装
筆者撮影

資料３－６　湾岸諸国向けと思われる衣装
筆者撮影

資料３－７　服飾工場
筆者撮影

人は、こういうものをよく見ますよね。アッラー、ムハンマドと書かれていますが、こうしたものはほぼMade in Chinaになります。これらを広い意味でのイスラームグッズとしてお話をしようかと思います。

資料３－４がコンテナです。まだ2007年ごろは鉄道で出すことができませんので、コンテナにパンパンに積んで船でイスラーム諸国に服を輸出していました。

資料３－５、資料３－６は、いろいろなイスラーム地域向けのファッションを各種取り揃えて作っている工場の中のサンプル室の様子です。資料３－５は中央アジアやそれ以外のところ向けかと推測されます。このようなものは「様品（ヤンピン）」と言って、サンプルです。そのころは、バイヤーがやってきて、「これを何ロットくれ」と注文していました。資料３－６のような黒めのものもあって、湾岸諸国向けかと思われます。

資料３－７は服飾工場で縫っているところです。この会社の社長さんは河南省出身の回族、ムスリムですが、従業員は全部が全部ムスリムではないという話をしていました。その証拠に髪の毛を隠していません。このころの義烏にはムスリムの人が多く、回族のムスリムの女性たちがたくさん出稼ぎに来ていました。彼女たちはムスリマなので必ず髪をヘジャブで隠していました。そうではないのは漢族です。

別の工場でも、回族の女性たちはヘジャブをかぶっていました。その会社の社長はスーダン人で、奥さんが中国人です。このスーダンの人は広州の中山大学に留学に来て、「ここはいいところなので、ここに移住することに決めた」と言っていました。「なぜ中国なんですか」と聞くと、商売がしやすいことと、もう一つは、そのころは貿易がうまくいき始めたときで、「これは儲かる」ということで、スーダンと中国を取り持つ貿易会社の社長さんをやっていました。この会社には女性のアラビア語の通訳がいました。アラビア語をどこで勉強するのかは、後でお話しします。

X社では、にせブランドをイスラーム地域に輸出する商売をしていました（資料３－８）。その会社の社長は、中国共産党員でありながら、漢語で「アホン」というイスラームの宗教指導者の資格も持っているというなんとも不思議な方でした。その人が貿易会社の社長もしていて、つまりイスラームのことをよく知っている方が、会社の社長をしてにせブランド品をイスラーム地域に輸出していたわけです。

資料３－９～11は、2007～2010年にかけて３回

No image

資料３－８　X社の伝票
筆者撮影

資料３－12　アラビア語の電光掲示板
筆者撮影

資料３－９　かぎ針編みで作られたイチゴ
筆者撮影

資料３－13　ヘジャブのサンプル
筆者撮影

資料３－10　アクセサリー
筆者撮影

資料３－11　糸
筆者撮影

ほど調査した時の写真で、中国義烏国際商貿城の中です。中国義烏国際商貿城は、東京ドームの85倍の広さがある、世界一の規模を誇る広大な見本市です。昨年の報道ではコロナでたいへんだという情報が見られました。かつてはたくさん人が歩いていましたが、現在はインターネット取引の発達もあって閑散としていると書かれていました。

資料３－９はかぎ針編みでイチゴを作ったものですが、卸ですのでバラ売りはなくて、１袋単位でしか売ってくれません。資料３－10はアクセサリー、資料３－11は糸、資料３－12はアラビア語が書かれている電光掲示板です。中東向けとわかるかと思います。

資料３－13はイスラーム地域向けの各種流行ヘジャブです。みなさまの調査地域の流行のスタイルは、ありましたでしょうか。だいたい義烏から来ています。

資料３－14、アラブ人がお茶をするときに小さなティーカップで出てきますが、こういうものも義烏で取引されています。アラブ人が好きそうなデザインですが、アラビア語でnoticeが書いてあります。

資料３－15はイスラーム世界向けの時計です。クルアーンの章句が書いてあるなど、各種各様のものが売られています。資料３－16は電子クルアーンで、

資料３－14　ティーカップ
筆者撮影

資料３－15　イスラーム世界向け装飾時計
筆者撮影

資料３－16　電子クルアーン
筆者撮影

資料３－17　礼拝用敷物展示ブース
筆者撮影

資料３－17は礼拝用の敷物の卸屋さんです。

10年ほど前は、義烏の町中の掲示は中国語、英語、アラビア語の３か国語で書かれていました（資料３－18）。国際商貿城以外にも、お祈りのカーペットを売るところがありましたし、ハラールレストランもたくさんありました。ムスリムの男性が白いスタンドカラーの長い服を着ているのを見たら、「これはきっと義烏から来たんだ」と思っていただいておそらく間違いありません。

資料３－18　３言語で書かれた中国農業銀行の広告
筆者撮影

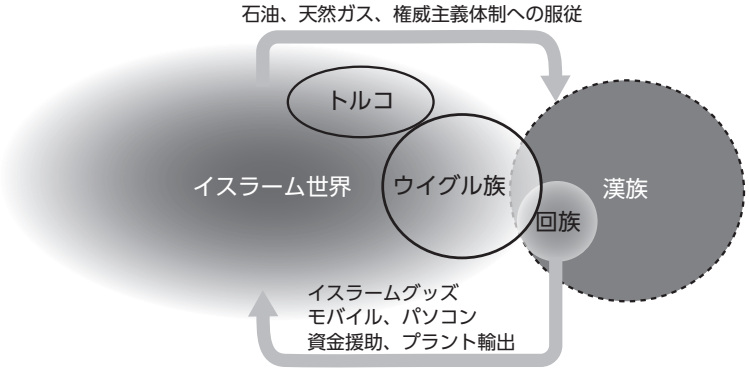
2015年からの「宗教中国化」による イスラーム大弾圧

2015年から「宗教中国化」が始まりました。私は2015年のときにはあまり着目していませんでしたが、2017、2018年からいろいろな報道が入るようになりました。たとえば、文革で破壊された後、再建されたモスクではアラブ風のたまねぎ型のドームがかなり多かったのですが、これがテロリストの温床になる、テロリストのものだとして誤解を受けるということで、破壊されるようになりました。これも言いがかりですが、アラビア文字はテロリストの言葉と見誤るという理由で公衆の面前から削除されました。たとえば寧夏回族自治区はアラビア語の道路標識が多かったのですが、それも削除されました。「HALAL」とアラビア語で書かれていたレストランの標識も削除です。

また、モスクに子どもを入れてはいけない、子どもにアラビア語を教えてはいけない、イスラーム学校もだめ、夏休みのアラビア語学習もだめ、幼稚園でもだめです。ハラール認証なんてどうでもよい、ヘジャブを着けて学校に来てはいけない、「モスクには国旗を掲揚しなさい。しないと罰するぞ」等々ということになりました。

資料３－19　中阿之軸

筆者撮影



資料３－20　イスラーム世界と中国の関係

筆者作成

また、これまでは「愛国愛教」というスローガンだったのが、特に新疆ウイグル自治区では「愛国愛党」に、つまりイスラームが消えています。私が最後に中国に行ったのが２年半ぐらい前ですが、モスクに行こうと思ったら、複数の監視カメラがあって、「部外者は入ってはいけない」と書いてありました。私たち外国人はまったく手も足も出ないことになりました。イスラーム学校には、イスラーム的な道徳を持っている、なおかつアラビア語がよくわかる、倫理的に正しい子を育成するという目的がありました。しかし、これがいまでは職業学校になってしまいました。

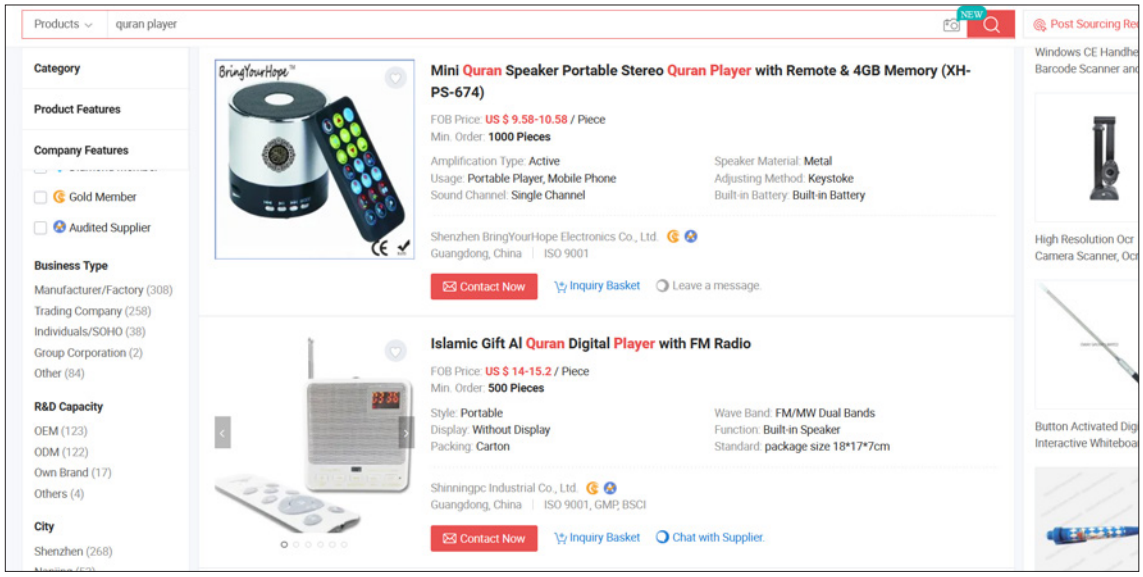
甘粛省の臨夏は、中国の小メッカと言われてイスラームが盛んなまちでした。そこに有名な臨夏中阿学校というアラビア語を教えるイスラーム学校があって、私は何度も行ってインタビューをしてきましたが、そうした学校はよくないという政府からの介入があって世俗化し、職業教育の学校になってしまいました。職業倫理教育であって、宗教教育ではない、民族教育かもしれないけれど宗教教育では断じてないということが、学校の案内に載るようになってしまいました。

また、「中阿之軸」という美しい回廊が銀川市の真ん中にあって本当にきれいだったのですが、これも壊されたそうです（資料３－19）。インターネットで見ると現在は何もなくなってしまい、「そこは中国人の祖先がもともと住んでいた場所で、中華民族の祖先である黄帝が住んでいたところだから、汚染させてはいけない」と、ヘイトに近いようなことが書かれています。

資料３－20が今日の話の構図です。右の円の範囲が中国だとすれば、イスラームグッズがイスラーム世界にどんどん行きます。中国からは資金援助があったり、プラント輸出がどんどん行ったりします。特にアフリカ諸国には、中国製の安いモバイルがどんどん行っています。逆にイスラーム世界からは、天然ガス、石油が来て、権威主義体制への服従というアメとムチでやっていることになります。

回族の人口は1,000万ぐらいですが、信仰だけで漢族と区別をされている特殊な存在です。現在は世俗化が進んでいて、豚を食べないだけという人も多くなっています。現在ウイグル問題がクローズアップされていて、彼らはこういうときにいつも苦しい立場に立ちます。ウイグル人側につくのか漢族側に

資料３－21　AliExpressで販売されているイスラームグッズ



資料３－22　クルアーンのデジタル・プレイヤー

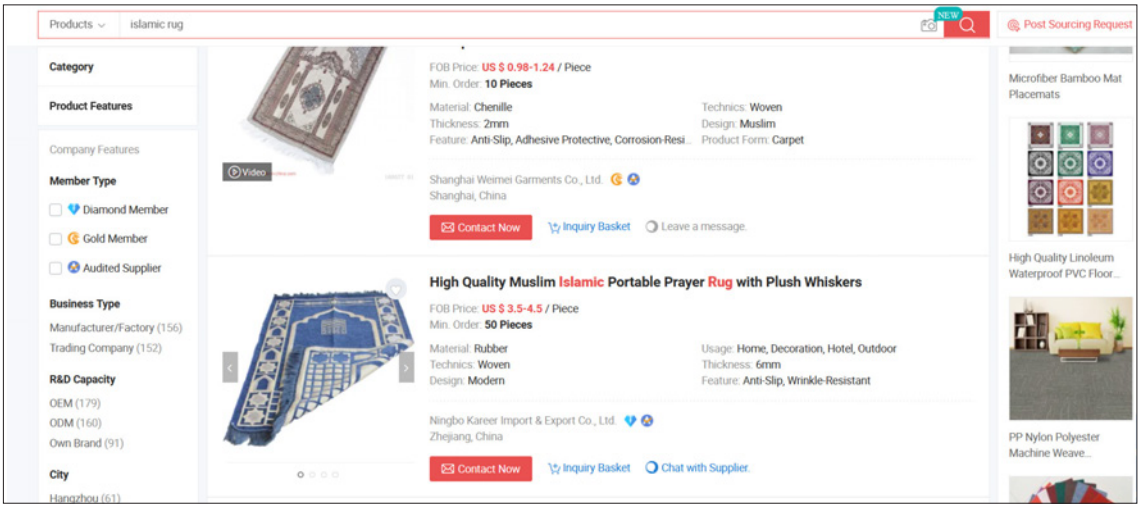
つくのか、それともウイグル人・回族両方弾圧されてしまうのかということが、ラティモアの1950年の*Pivot of Asia*という本にも書いてありました。かなり厳しい図式になっていると思います。

自動翻訳で大躍進 アリババによる輸出イスラームグッズ

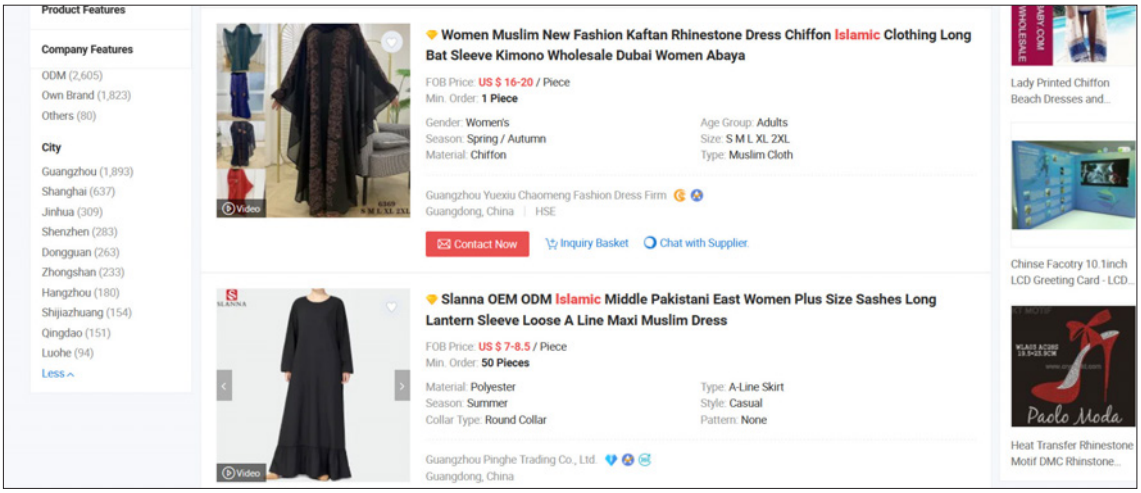
みなさんのなかでアリババで品物を買ったご経験がある方はおられますか。私はある雑誌で読んで、さっそくAliExpressのサイトを見てみました。すると出るわ、出るわ、まるで研究資料のような感じです。イスラーム地域を研究している方にとっては、おなじみのものがたくさん売っています。お祈りのときのビーズ、敷物や女性のヘジャブ、クルアーン・スピーカーや、子どものためのアラビア語学習機などもあります（資料３－21）。日本円で500円ぐらいで買えるのでかなりお安いです。こうしたイスラーム世界向けのさまざまなものが日本語で買えます。売れ筋がよくわかるのも興味深いところです。

別のサイトで見ると、広州が多いですが、義烏もなかなかがんばっています。資料３－22はクルアーンのデジタル・プレーヤーです。10ドルぐらいで、「買えないことはないな」という感じです。中国国内ではどう考えても禁止されているはずですが、売る分にはまったく構わないらしく、売れています。電子機器は深圳製が多いようです。

ドレスやヘジャブも売られていて、上海や広州、義烏、河南省の漯河で作られたもの多く見えます。資料３－23はカーペットですが、広州で作っているものが多いです。資料３－24の黒ずくめのムスリマ向けのシフォンのドレスが16ドル、手が届きそうなお値段です。生産地は広州、上海、義烏（金華）という順番で並んでいます。



資料３－23　Webサイト上で販売されている中国産のカーペット



資料３－24　イスラーム式ドレス

唯物論の神はイスラームグッズを祝福し給う――無信論と信仰グッズの矛盾をどうするのか

本日のタイトルは「唯物論の神はイスラームグッズを祝福し給う」としましたが、唯物論と宗教には絶対的に矛盾があります。文革時代は、イスラーム文献はすべて禁止でした。イスラーム用品ももちろんだめです。礼拝はできませんし、モスクは破壊されました。ムスリム女性は髪の毛を長くしてみつあみにして巻いていましたが、それも切らされました。男性のひげも禁止されました。豚飼育を強制させられ、ひどいところでは豚肉を強制的に食べさせられました。そして資本主義の道も存在しませんでした。

それが改革開放期に一変し、イスラーム復興期がありました。私が調査できていたときに彼らは「『イスラーム復興』と言うな。『文化自覚』と言え」と言っていました。なぜかと言うと、世界中のイスラーム復興と共振しているように受け止められ、それに政府が敏感に耳をそばだてるからだとよく言われました。

そしてモスクの再建があり、そのなかで1990年代半ばからイスラーム学校が設立され、アラビア語の通訳やイスラーム指導者が養成されるようになりました。女性のためのイスラーム学校も1980年代半ばからできはじめました。先に紹介した工場で通訳として働いていた女性たちは、こうした学校で学んでいたわけです。また、改革開放期には市場経済が導入され、文革期の「資本主義は絶対だめ」という時代とはまったく違う道を歩んできました。

では、現在はどうなのか。半分文革です。イスラーム文献は隠されました。子どもはモスクに行くことはできません。イスラームの宗教指導者を愛国主義者にしなければいけないということで、そうした人々はテロリスト予備軍として監視されていると言われています。にもかかわらず、資本主義を奨励しているし、

義烏では外国人ムスリムの存在はOKです。そしてイスラームグッズを作ったり、輸出したりすることはまったく問題ありません。その仕事をしているのは回族の経営者であるケースが多い。これをどう考えたらよいでしょうか。

宗教なき時代、世界をさきどりする中国？

現在は、国内の宗教勢力には文革に近い対応をしつつ、国外の宗教勢力には沈黙を強要している可能性があります。その一方で、国内の無神論者には「太平の世」が来ており、物質的にも豊かになっています。国外の発展途上国に対しては対外開放して、「よき顧客」であり「よきパートナー」、「よき援助者」であるというかたちで存在しています。国外の先進国に対しては「チャイナ・フリーは考えられないだろう」ということで、経済的な相互依存関係に陥っています。服やモバイル端末など、もはや中国製なしでは生きていけない社会に私たちは生きています。

このような現実を見ると、基本的人権、自由、法治、民主など、いわゆる普遍的価値と言われるものが、新自由主義の「儲ける自由」のなかでこぼれ落ちそうになっているように見えます。「無神論の神」がチャイナグッズという形で世界に拡散している、ばらまかれているのが現状ではないかという気がします。

斎藤幸平さんの『人新世の「資本論」』（集英社新書、2020年）という本が話題ですが、この二十数年の中国における世界の工場としての変化を見ていると、まさに「人新世」のなかで、無神論者による「来世なんかない。死んだらおしまい。ならば一回限りのこの世を楽しく生きよう」という考え方とグローバル資本主義とは、強い親和性をもって広がっていると感じます。

質疑応答

帯谷知可（司会）　ありがとうございました。中国の現状をふまえて、目を見開きたくなるようなわくわくするような部分と、危機感を目の前につきつけられる部分がなぜ、いかに両立しているのかにも踏み込んだご報告だったと思います。質問等ございますか。

後藤絵美　宗教グッズという「神様のために使うもの」というストーリーを持ったものが取引されるけれど、それを持ってくる人たちは宗教的な人たちを弾圧したりもするという構図でした。日本だとヘイトスピーチをすると不買運動が起こることがありますが、中国の製品に関してはそういうことはあまり聞かないですか。

松本ますみ　義烏で話を聞いたところでは、「ここに来る世界中のムスリム商人たちは、宗教はどうでもいいんだよ」ということでした。儲けたいから来ているのであって、それがたまたま義烏だというだけだと言っていましたね。私たちはすぐ「宗派は何派ですか」と聞いてしまいますが、「そんなのどうでもいいんだよ」ということです。パレスチナ人の方も来ていて、「お国はたいへんですね」と聞くんですが、「売れりゃあいいんだよ、売れりゃあ」という感じでした。

香室結美　ヘレロの人たちもチャイナショップでアクセサリーを買って、それをロングドレスと組み合わせることも普通にありますが、私はナミビアのチャイナショップで、日本で見るMade in Chinaとは明らかに品質が違うことに、すごく驚きました。先生のご専門とは少し違うかもしれませんが、日本向け、イスラームの某国向け、アフリカの某国向けといったように、中国内で作り分けがされているのでしょうか。

松本　されています。義烏で私が言われたのは、「おまえ、日本人かよ。日本人は検品が細かくて嫌だ」ということでした。日本の100円ショップのものも、よくできているでしょう。あれは日本向けの製品です。つまり私は彼らから、日本向けに出すと儲けが少ないから嫌だ、と言われたのですね。本日の報告では触れませんでしたが、アフリカ向けの商品もたくさんあって、アフリカの赤ちゃん向けの安い紙おむつもたくさん売っていました。中国がすごいのは、一流品から五流品まで作れるということです。すべて使い分けができる。

たとえば、私が試しにAliExpressで買ったヘジャ

ブを見てみると、「日本では絶対に検品が通らないだろうな」というほど、粗いミシンの掛け方がされてあります。「安かろう悪かろう」です。

参加者　以前エジプトのお土産屋さんでは、「まともなものは中国製で、エジプト製は適当に作ってあるからすぐ壊れるよ」と言われていましたが、中国製品にはMade in Chinaと書いてあるので、「エジプトまで来て中国製品を買うのは……」と、お客さんがそれを棚に戻してしまうという話がありました。そこであるときからMade in Chinaとは書かずにアラビア語で「中国製」と書くようになりました。いまご紹介いただいたイスラームグッズは、Made in Chinaと書いてあるのでしょうか。

松本　私が買ったヘジャブにはMade in Chinaと書いてありました。先ほど紹介したX社の方が私に贈ってくれたスカーフは全部アラビア語表示のタグがついていました。おそらく私が買ったのはグローバル商品なのでMade in Chinaと書いてあるのだろうと思います。なんといってもAliExpressですので、どこに行くかわからないですから。

　ちなみに、AliExpressのWebサイトを見ていると、「商品が着きました。ありがとう」というコメントが掲載されていますが、ヘジャブに関しても世界各国からコメントが来ていました。フランス、ロシア、カザフスタン、UK、アメリカ、とにかく世界中です。

参加者　コーランにも「中国で印刷しました」と書いてあるのでしょうか。

松本　印刷物についてだけはないと思います。ただし、先ほど紹介したクルアーン・スピーカーは中国製です。こうしたグッズをなぜ製造できるのかというと、アラビア語がものすごく堪能な人が中国内部にいるからです。

コメント1

安城 寿子　阪南大学

たいへん興味深い三つのご発表をありがとうございました。どれか一つのご発表についてコメントするのでも、すべてのご発表についてコメントするのも、どちらでも自由ということなので、私は二つ目の香室先生のナミビアのロングドレスのご発表について、コメントさせていただきます。

■ ともすると固定的に捉えられがちな民族衣装の多様な形態が浮き彫りに

香室さんが発表の最初でおっしゃっていたように、ある地域固有の伝統衣装や民族衣装というものは、ともすると不変で固定的で流行がないものとステレオタイプ化されたイメージのもとに語られやすいというのは、まさにそのとおりだと思います。それに加えて、私たちは日本で生活していて、日常的にナミビアのファッションを含む文化に触れる機会が少ないだけに、単純にどういうものかよくわからないということがあるので、よくわからないだけに、少し調べて出てきたイメージで全体を捉えようとしてしまうこともあると思います。

そうしたことがあるなかで本日の香室さんのご発表は、ヘレロのロングドレスの成り立ちを最初に概観されたうえで、開催場所、目的が異なる4つのファッションショーを取り上げて比較されることで、このロングドレスにも多様なかたちがあることを鮮やかに浮き彫りにしておられたと思いました。

具体的に言うと、それぞれ4つのファッションショーにおいて、①伝統の表象、それから流行との関連で②現代性の表象、そして③宗主国との関係性の表象、最後が④ローカル性の表象、それがまったく異なるかたちで行われていて、最後のまとめで言われたように、それぞれに決して単一ではない規範があることがよくわかりました。以上のことを踏まえて、いくつか質問をさせていただきます。

■ ロングドレスの商業規模と規範をめぐる若者と年長者のせめぎ合い

一つ目は事実関係に関する質問です。ナミビア国内、それから国外においてこのロングドレスの商売は、どれぐらいの規模の商売として成り立っているのかを教えていただけたらと思います。

それから、今日のこのワークショップのテーマが「装いと規範」ということで、規範と関わる質問ですが、取り上げられていた4つのファッションショーの最初の例で、エキプロで開催されたファッションショーで、牛のように歩くパフォーマンスがあって、それが優美さの基準になっていたというのが個人的にとても興味深く感じました。「若い子にはああいう歩き方はできないから」という声があったという話もあって、ご著書ではショーの最中に「そういう歩き方じゃだめだよ」と言って乱入してきた人がいたということも書かれていたと思います。そういった昔ながらの旧弊な身振りを巡る規範に対して、若者がそれを鬱陶しがったり、あんなものはいちいち守りたくないというような、若者と年配の人の間でせめぎ合いみたいなものはないのか。あるいは若い人も積極的にそういう身振りを継承しようとしているのかどうかをうかがえたらと思います。

■ 旧宗主国でのファッションショーを巡る批評・批判の状況は

三つ目の質問としては、2010年にベルリンで行われたファッションショーで、昔のドイツ風ドレスを着たドイツ人の女性と現代風に変容を遂げたロングドレスを着たヘレロ人の女性が登場して感動を呼んだという事例が紹介されていました。これについて批判的な見方をすれば、感動的な物語に落とし込むことによって、旧宗主国との間の決して対等ではない虐殺も行われたりした歴史が無効化されてしまうという見方、批判もあり得るかなと思いました。そうした批判がこのショーを巡る批評として出てきたのか、あるいはそもそもそこまで批評が活発に行われないということもファッションショーにはよくあると思いますが、そのあたりの事情をうかがえたらと思いました。

■ナミビアのデザイナーにとっての パリ、ベルリンの位置付け

そして最後に、これは完全に私自身の研究の問題関心に引きつけた質問になってしまいますが、たとえば日本の場合1960年代から1980年代にかけて、日本人のファッション・デザイナーが海外に進出していくときに、まず圧倒的にパリという都市への強い憧れがあって、それに次いでニューヨークという感じで、進出する先の都市の序列がありました。現在は昔と違ってパリコレの権威が失墜しているとはいっても、ナミビアの場合どうなのでしょうか。

これは本日の報告では触れられていませんでしたが、ご著書では、エミシランバがベルリンでのショーの成功の後に、アトランタとパリでのショーを企画していたと書かれていました。ナミビアのデザイナーにとって、たとえばパリでファッションショーを発表することに対する強い憧れがあるのか。それとも、まずはベルリンに行こうとするのか。あるいはそういう都市の序列に対する意識はそんなにないのかについても教えていただけたらと思います。

コメント2

杉浦 未樹　法政大学

たいへん充実した三つの発表を聞かせていただいて、とてもいま幸せな気分です。エピステモロジーという言葉がありますが、まさに衣類とその装いをめぐる行為、それからもっと広いものに対する認識がさざ波のように、ダイナミックかつ、細かく多層的な文脈を生み出しているということが、どの発表にも感じられました。すべての発表に対して複数の質問をしたいのですが、時間もあるのでできる限りのところでお答えいただければと思います。

■認識と文化財化の時点およびミャオの働きと消費可能化における海外移民の役割

まず佐藤さんの発表についてです。最初に中谷文美先生の事例を引かれて、モノが文化財になるには消費可能なモノへの転換があると位置付けられたことに関連して質問します。中谷先生の事例ではローカルなところで、エスニック・グループのリーダーのような女性がそれを再生産するというイニシアティブがあって、それが正当性を確保して、さらに地元の方やツーリストやコレクターに売れていって、それでまた新たな正当性ができて文化財になるといった過程だったかと思います。佐藤さんが取り上げた事例では、外部のコレクターや図案を研究された方、そして博物館において、「認識される時点」と「文化財になる時点」とは同時的なものだったのでしょうか。そしてその場合は、ローカル、つまりミャオ族、ムウの作り手や装い手の役割はどんなものだったのかを教えていただければと思います。

法政大学の山本真鳥先生が、サモアのファインマットを取り上げています。そちらでは、移民の仕送りのお礼品として作っているあいだに品質が悪化し、逆にそれを地元のイニシアティブでもう1回高級品にして品質を向上させて、それで消費可能なものにするという過程があったことを教えていただいたことがありました。このムウについて、他の研究ではアメリカの移民が民族衣装として取り上げているという発表も聞いたことがありますが、海外の移民の役割についても教えていただければと思います。

■ヘレロ・ファッションがもつ不快感の軽減機能とファッションショーの継続

次に香室さんの報告についてです。今回の報告では、異なる文脈のファッションショーでの提示のされ方を分析されていました。わからないなかでの質問で失礼かもしれませんが、これをやめさせようという動きはなかったのでしょうか。外に対する目や、安城さんもおっしゃっていた世代間のジレンマや抵抗と、もう一つは外国の人たちから見たら、たとえばドイツ側のファッションショーでは美意識が共有されていたというお話でしたが、ドイツ側にとってこのヘレロのファッションは、居心地の悪いファッションではないのか。そこでこのファッションの中に相手側に不快にさせない装置みたいなものを持っているのかうかがいたいです。

もう一つは、ナミビア・ファッション・コレクションができたそうですが、2012年で中止になったというお話でした。これをもっと継続的な組織化したものにしようという動きがあるかをうかがいたいです。

また佐藤さんの発表とつなげて、ヘレロ・ドレスが100年を超える歴史を持ってきたものとなっている今、これを文化財として捉えるという動きはあるのかをおうかがいしたいです。

■グローバル向けに作るイギリスおよび各地のニーズに合わせて作る日本との違いは

最後の雄大な松本先生の発表も、たいへん興味深くうかがいました。タイトルにありました世界の工場について経済史の立場から、19世紀から20世紀の日本とイギリスのやり方に対して中国はどうなのかについてお聞きしたいと思います。特に注目したいのが、トランスボーダーに展開していることです。トランスボーダーに展開する装置を持ち、安さを実現するインフラが整っているなかで、それをどう利用しようとしているのか、またそこで何か新しいことが動いているのかをお聞きしたいです。

具体的に話しますと、たとえば19世紀の世界の工場のイギリスは、いろいろなところで売るときに各

地の需要の細かさに悩まされて、ご報告の後の質疑応答にもあったように、この時のイギリスには、乱暴なまとめかたでいうと棲み分けることを自分たちがしたくないからグローバルに受けるものを作っていこうという思考があったかと思います。1930年代のアフリカの資料で、イギリス人が「土人に安く売る必要はない」と言っていたと読んだことがありますが、安いものを提供したほうがいいだろうという思考がない。

それと対照的なのが20世紀の日本のやり方です。これも乱暴なまとめ方ですが、各地の需要に沿って製品を作って、棲み分けをします。しかし、逆にその反面、越境性がなくなってしまう。日本でたとえばアフリカ向けの商品が国内で売れるとは思わなかったし、それがヨーロッパでも売れるとは思わないというような姿勢が見られたと思います。

また、安さは志向しますが、輸出先市場における日本製品の地位は上昇していかないと困る。ですから、日本にはなるべく他の高級品と一緒になれるような可能性を持っている製品を提供することを目指すというところがあったと思います。

以上のようなイギリス製品や日本製品がトランスボーダーに売るときにとってきた姿勢に対して、中国製品はどうなのかをうかがえればと思います。

コメント3

杉本 星子　京都文教大学

三つのご報告ともたいへん勉強になりましたし、どれもわくわくするようなご報告でした。私は前回インドのサリーを中心として、インドのナショナリズムと絡みながら民族衣装がいわゆるナショナルなものになり、さらにそれがファッションになり、それがまた現代においてどう政治とつながっているかというお話をしました。

日常的に着られているものが国民国家の形成のなかで民族のエスニックなものとして位置付けられ、さらにそれがグローバル化のなかで、国を代表するような表象を付けられる。そしてナショナルな価値を帯びたそれが、現代もう一度環流してローカル化するという大きな流れが存在します。本日の佐藤さんのお話も香室さんのお話も、こうした世界の民族衣装をめぐる動きに添ったものだと思いました。

前回も含めてですが、これまでこうした話は、特にグローバル経済との関係で語られることが多く、特にインドで議論をするときはそうなるのですが、本日の報告では背景にある政治的なコンテクストがとても重要だということについてあらためてお話しいただいて、私としてはそこがとても興味深く感じました。

■ミャオの刺繍のアンティーク的価値および女性のエンパワーメントと文化財化との関係

報告者のみなさんそれぞれに質問したいと思います。まず佐藤さんですが、消費と商品化が本日のお話のキーワードだったと思います。グローバルに商品が流通する場には、布にも刺繍にも、アンティークのネットワークが存在しています。そのアンティークもいわゆる安物だけではなく、美術品としてのアンティークもあります。ミャオの刺繍品などはそういった市場でも価値を持っているのではないかと思われます。その点についてお教えください。

もう一つ、たとえば中国の民族衣装ですと、ろうけつがプリントになったり、あるいはリボンを使うようになったりという変化があります。そうしたことが起こっていくことによって、逆に手作りのものが評価されて文化財化していくという動きがあると思います。そのときに、東南アジアやインドでもそうですが、女性が手仕事をして伝統的な刺繍を作ることが女性のエンパワーメントと結びつけられて、そういった文化財化につながっていくことがあります。そうした動きが佐藤さんのフィールドであるのかなということです。

あと一つは、ミャオの民族衣装が高評価されるような動きが現在の中国での若い人たちの漢服の流行にも何らかの大きな影響を与えているのでしょうか。このあたりを補足で教えていただければ、ありがたいと思います。

■輸入布が民族衣装に与えた影響とヘレロ以外のエスニックドレスの動きは

香室さんのお話も、アフリカの本当にすてきな衣装を見せていただき、特に宗主国との複雑な関係のなかで、自分たちのアイデンティティを創出していくところがすばらしいなと思って聞きました。

先ほど素材についてうかがった際に、もともと輸入布だとおっしゃっておられました。ドイツが宗主国ですからドイツやオランダから入っていたと思いますが、おそらく第一次世界大戦以降やその前後ぐらいから、日本の布がかなり入っていったのではないでしょうか。さらにはインドの布も入っていったと思われます。この輸入の布の市場の拡大や流通の拡大と、こうした民族衣装の一般化あるいはその創造というのは何か関連があるのだろうかということが一つです。

もう一つは、最後のほうに新しいデザイナーさんの民族衣装で少し他のグループのお話が出ていましたが、こうした自分たちのエスニックドレスを作る動きは、他の民族でも同じようにあって、本日お話しいただいたグループがそのリーダー的な役割を果たしているという位置付けなのかどうか。このあたりを教えてください。

■世界に向けた各地の民族衣装の輸出において中国側の創意工夫は見られるか

松本先生のお話もたいへん興味深くうかがいました。じつは私は横浜のプリント布の輸出の話をいろいろ聞き取り調査していたのですが、1970年代ぐらいまでは、日本の布がたくさん輸出されていたそうです。特にアラブ世界が大きな市場です。そのアラブ世界に輸出していた方に、いろいろな見本商品を見せていただいたなかで、黒のブルカに刺繍が付いている製品があって、「じつはこれは自分たちが始めた」というお話をしてくださいました。日本がそれを売り出したところものすごくヒットしたと。現在ではアラブの服に刺繍がついたものをよく見かけますし、特にインドではかなりそれを着ています。それに関連して、輸出する側が何らかの工夫をして影響を与えていくようなことが、中国で世界の民族衣装を作っている現場でも、それを注文に来る人たちとの話し合いのなかで起こっているのかどうかをうかがいたいと思います。

特に気になっているのは、インドのサリーの布地もかなり中国から入ってきていて、そこにキラキラしたものが入ったりしています。そのあたりに、ただ注文されたものを作るだけではなく、もっと売れるための工夫があるように感じます。中国で作る際に、そうした事例をご覧になったことがあるかどうかという質問です。

ディスカッション

●発言者
佐藤 若菜（新潟国際情報大学）／香室 結美（熊本大学）／松本ますみ（室蘭工業大学）

●司会
帯谷 知可（京都大学）

帯谷知可（司会）　コメントに対するレスポンスを、報告者の皆さんに順番にお願いします。

■消費可能化から文化財化への価値の転換と実際の作り手・装い手たちの関わり

佐藤若菜　まず杉浦未樹先生、ありがとうございました。鋭いご指摘で、私もこれから結論を考えるにあたって、この点に注目しなければいけないと思いました。また山本真鳥先生の研究もぜひ参照したいと思っています。たしかに最初は収集の対象となっていましたが、それはあくまでもデザイン・リソースとして集めていたにすぎないので、これを消費と呼べるのかどうかは難しいところです。もう少し厳密な議論をしなければいけないということがよくわかりました。

その後、1980年代以降にデザイン・リソースとして集められたものが展示品となるなかで文化財、たとえば「中国の宝」といったかたちに転換していきます。やはり日本と中国との関わりの部分から価値が変化していったと考えると、もしかしたら消費可能に徐々になっていくなかで文化財に切り替わっていくというように、実際には中谷先生の事例とは少し違うのかなと思いました。

ローカル側の作り手や装い手の役割についてですが、これも私自身この研究に関しては弱いというか、すごく見えにくかった部分です。日本の展示会に「中国からも数名呼びましょう」ということになって、ほとんどは幹部と呼ばれる公務員の方たちが行きましたが、最終的に漢族ばかりになってしまって、「何人か少数民族を入れないとよくないのではないか」という話になったそうです。それで少数民族、プイ族やミャオ族を１人２人入れたという話もしていました。しかし、彼らにインタビューをしてみると、日本の展覧会でワークショップなどをした際に、日本側からの「この模様はどんな意味ですか」といった質問に対しては、「知らない」と答えたそうです。そういった民族エリートの人たちも、「よくわからないので、とりあえず自分の知識のなかで答えたんだ」と話していました。

つまり、実際の作り手や装い手が文化財への切り替わりに直接関わるようになるのは、ずっと後になってからです。私が知る限りでは、1990年代になると、中国の内陸部、農村部が少しずつ少数民族地区を開放していきます。そのなかで、日本人をはじめとした外国人が現地の人が着ている服を直接買い取るということが頻繁に行われるようになりました。そこから徐々に現地の人にも「これは売れるものなんだ」という認識が浸透し、さらに「古いものやアンティーク、骨董が売れるんだ」という意識になって、彼らが徐々に関わるようになっていったのかなと思います。

■アンティーク市場にのみ出回るムウの衣装で見えづらい移民との関係

佐藤　移民との関係は、じつはムウについてはかなり見えにくいです。なぜなら世界中に広がっているミャオ族のほとんどがモンです。モンの研究者である宮脇千絵さんという方の研究書を見ると、ラオスから雲南へ、モンの衣装の――モンの衣装は主には工場で生産されていますが――注文があって、徐々に新しいデザインが生まれるという流れがあります。今回この２点、①価値の転換をもう少し厳密に見ることと、②作り手の影響をこれからもう少し詰めていきたいと感じました。

■手仕事と女性のエンパワーメントに関する中国特有の事情

佐藤　杉本星子先生もコメントありがとうございました。美術品としてのアンティーク市場は、くわしい方は本当にたくさんいますが、私の財政的問題もあって、タイなどの、いわゆるアンティークが好きな方々が集まるような市場については、まだほとんど知りません。どうやらそういうアンティーク市場にもかなり流れているということは知りつつも、これも一つ課題だなと思いました。

手仕事が評価されるなかで東南アジアの特徴としては、女性のエンパワーメントとともに文化財に変わっていくということは、私も中谷先生をはじめとした先生方の本を読んで、たいへん勉強になりつつも、中国の事例ではちょっと違う部分があります。ムウの場合は、私の知る限りでは、日本の収集家が、貴州省に手仕事の継承者がいないので、まず学校を建てましょうということで、学校を建てて担い手を育てて、そのなかで手作りしたものを日本で売るということをしていました。くわしいことはわかりませんが、現在はストップしています。中国ではそういった技術や知識は外国人に取られてはいけないという認識があるので、私自身も調査対象が刺繍技術だと言ったときに、ある時期だけは調査許可がまったく下りないということがありました。おそらくこの収集家の方もいろいろたいへんなことがあっただろうなと思います。

最近では、中国の収集家が、ミャオ族女性が着ているものではなくて、図案をもとに様々な洋服やグッズを作っています。今日もこの発表にあたって動画を検索していたら、政策の一つとして「民族衣装を商品化して、貧困を改善するんだ」と言っていて、おそらくその流れに彼女はうまく乗って進めているのではないかなと思います。ただ、現地のミャオ族女性のエンパワーメントや手仕事への再評価についてはあまり進んでいないというのが中国の現状だと思います。

二つ目の漢服の流行による影響というのは、今後の課題とさせていただければと思いました。いままさにいろいろな方が漢服の流行に注目されて研究をされているので、私も一緒に議論ができるように、少し勉強させていただければと思います。

帯谷　続いて香室さん、いかがでしょうか。

■ロングドレスの商業規模と若者と年配者とのせめぎ合い

香室結美　まず安城先生の質問に答えたいと思います。1点目ですが、国内外の商売規模については、基本的にはヘレロ内で流通が留まっている状況です。ヘレロの人やヘレロが雇った他のナミビア人がヘレロのために作るということです。全国的に見るとそこまで大きくはないですが、ヘレロのなかの一つの職業としては確立していて、多くは女性が作り手で、その方たちが作ってかなりのお金を稼ぐことができる職業として成り立っています。

2点目に、「牛のように歩く」と紹介した「牛歩き」について、若者と年配者の間の規範のせめぎ合いに関する質問がありました。「ヘレロのロングドレスを着たときには、誰でもゆっくり歩かないといけない」というのは、若者であれ年配者であれ、基本的には共通した感覚としてあると言えると思います。

ただし、それを実際に舞台に上がってやりたいか、やりたくないかというと、若い子に聞くとおそらく「いや」と言う人が多いだろうとは思います。あの動きをどこでみんな練習しているのか、そういうところまでは調査ができませんでした。ただし、デザインの面での若者と年配者のせめぎ合いがあると言いましたが、基本的には若者がいつの時代も新しいことをやりたがってきたということはヘレロの人も言っているのを聞いたことがあります。そういった若者の新しい価値への欲望と、それまであった規範というのは、常にせめぎ合っているのではないかとお答えをさせていただきたいと思います。

■ドイツでのショーについての評価および開催地と継続をめぐるヘレロの状況

香室　3点目のベルリンの2010年のショーでドイツ人がヘレロのドレスと並んだ出し物をしたことについて、批判については私が知る限りではなかったです。ヘレロの人たちに聞いたところ、紹介したインゲという方のインタビューでも、かなり「感動した」という話でした。他のデザイナーの人たちからも、「あれはすごかった」という語りがありました。新聞記事などでも、批判というよりは友好的な見方が多かったとは思います。

ただし、ご指摘のとおり、もちろんそもそも対等ではない関係で、現在も経済的支援というかたちでドイツ人はかなり入っていますし、ナミビア国内の企

業にもドイツの資本が多く入っています。また、ホテルや商業施設の多くについてドイツ人の子孫が実権を握っており、土地にしても広大な土地をドイツ人の子孫が持っている状況です。ですから、日常的に対等ではないことはヘレロの人たちも常々感じていて、そういった前提があってああいうショーがあったので、私もどちらかと言うとユートピア的な見方をしてしまったところがあるかなと思いました。批判的な見方ももちろんできるとは思います。

４点目の質問で、日本の場合はパリへの憧れがあるという話ですが、ヘレロの人たちの場合はおそらく現状としてヘレロのロングドレスがヘレロ内で基本的には留まっているので、そこまで意識がいっていないのではないかとコメントをうかがって思いました。組織者の人たち、エリート層の男女の人たちは、現実的に可能だったらアトランタで開催しよう、パリでしよう、知り合いがいるから、コネクションがあるからという理由で、おそらくショーの場所を決定していたような話でした。もちろん、一般的にはパリへの憧れというのはあると思います。ただし、そのときは現実的に可能かという部分で話が動いていたように思います。実際にその後うまくいったのか聞きましたが、なかなかうまくいかず、実施はされなかったということです。

杉浦未樹先生の質問にも絡むので、杉浦先生からの２点目にここで答えようと思います。2012年に中止されたファッションショーも、組織者たちが自分たちの仕事をしながらファッションショーを善意というか情熱だけで行っている状況でした。それにFNBという銀行がスポンサーになってくれて、たまたま実施できていました。その資金繰りと組織者たちの尽力・献身が釣り合わなくなって、2013年以降は難しくなったと聞いています。「もう続けなくていいの」と尋ねると、「ある程度私たちは役目を果たしたからいいんだ」と言っていました。

■ヘレロのロングドレスに関する ドイツとナミビアでの受け止めと新たな展開

香室　杉浦先生の１点目の質問ですが、このロングドレスの着用をやめさせようという動きがあったのか、なかったのか、ドイツ側は実際どう受け取っていたのかという点です。ロングドレスの着用をやめさせようという動きは、私が知る限りでは聞いたことがありません。ただし、軍服を着て行進をしていた点について、当時の支配者の南アフリカが「あの人たちは大きな抵抗を示しているのではないか」というところで引っかかって、監視の対象にしたことはありましたが、女性のドレスに関しては知る限りではないです。

ロングドレスに対してドイツ側の居心地の悪さはなかったのかについては、いま私が答えることはなかなか難しいと思います。そのときはおそらくドイツ側も、歴史的な背景というよりも、商品と言っていいのかファッションと言っていいのか、そういったところでおもしろくしようとしたのかなということは何となく思いました。

関連することとして、今後ヘレロのドレスを、たとえばナミビア出身のデザイナーがナミビアのデザインの一つとして、自分のデザインとしていくことも考えられるかなと思います。たとえば、ナミビア・ファッションショーの後にできたWindhoek Fashion Weekという2020年のイベントでは、名前からするとヘレロではないデザイナーがナミビアのかたちの一つ、スタイルの一つとして自分のデザインにヘレロのオシカイヴァなどを取り入れて発表したと推測される事例がありました。こうした動きも今後は出てくるだろうと思います。

また、ドイツ系のナミビア人女性がヘレロ女性の写真を撮っている事例が一つあります。ニコラ・ブラントという人ですが、その人は写真家で自分がヘレロを撮りつつ、自分もヘレロのロングドレスを着て被写体になっている写真があります。それをヘレロの人がどう受け取っているかというと意外に友好的で、自分たちのドレスを着てくれるということで受け入れている。これは最近の話ですが、そういう広がりもあって、それはロングドレスだからできるのだろうという実践で、どう解釈するかはこれからの課題ではありますが、興味深いと思っています。

杉浦先生の質問の３点目、文化財化する動きというのは、これもまだそこまでいっていないのではないかという印象があります。ミャオ族の衣服を見て、言い方が難しいですが、やはりレベルが違う、歴史が違うというか、やはりヘレロのロングドレスとは違うものを感じました。刺繍の高い技術などさまざまな理由があると思いますが、そのレベルまではいっていないのではないかといまのところお答えしたいと思います。

■素材の入手が容易になることで もたらされた衣装の変化

香室　杉本星子先生のご質問で、素材に関して、第一次世界大戦と第二次世界大戦のあいだで日本やインドからも布が入ってきたのではないかという指摘がありました。これは私はまったく知らなかったので驚きを感じました。多く布が入ってきたことで、人々が布を手に入れて、布を使ったものがより作りやすくなったということは、おそらくあったのではないかと思いますが、現在のところ私から答えることはできないです。

ただし、ポリエステルなどいろいろな布の素材がナミビアにも入っているので、その素材を使って可能になることもあります。ロングドレスで言うと、ペチコートがもともと布で、かなり重かったんですね。２メートルぐらいの布を３枚から７枚ぐらい重ねるので、ものすごく重くて動きづらい。それをポリエステルにしようという動きが最近あって、とても軽くなりました。それがまた、「これだったら着られるわ」と、若者も着やすくなるような工夫でもあるかと思います。

それから、オシカイヴァという被り物は、じつは中に新聞紙が丸めて入っています。独立した1990年以降にこの被り物は普及しましたが、あるデザイナーが新聞紙を入れたら型が決まるということで始めて広がって、現在ではみんなそれを使っています。それ以前は木の棒を入れたり、砂糖で固めていたという話もあります。新しい素材でより型が決まったり、より自由になったりということはあるのではないかと思います。新聞自体も、1990年は国が独立した年であり、『ザ・ナミビアン』という新聞がその前年あたりから発刊され始めたので、おそらく一般の人が新聞を手に入れやすくなったことも関係しているかと思いました。

２点目の、自分たちのドレスを作るという動きが他の民族にもあるのかについては、他の民族の人たちも自分たちのドレスは持っていますが、いわゆる文化的な場や儀礼の場で主に着られているのではないかと思います。あまりヘレロの人のようにファッション化しようとか、ショーをするというのは聞いたことがありません。

帯谷　続いて松本先生、お願いします。

■これまでにない速度で多様な商品を作り 全世界に一律に販売できる中国

松本ますみ　杉浦未樹先生の質問からお答えします。まず、グローバル化ということで、イギリスとの歴史比較ができるか、そのときに市場をどう考えるかというご質問だったと思います。ヨーロッパの場合は奴隷には安いものを高く売りつけようということがありましたが、現代は情報化の時代ですので、そういうことは難しく、品質によって価格帯が違ってくる。これに関しては平等であると言えると思います。

先ほど杉本星子先生が言っていたキラキラした装飾がついた衣装も、アリババのサイトで販売されていて、世界中の女性が買っています。当然ですが、価格はどこも同じです。アリババの何がすごいかというと、おそらく全世界についてほぼ送料無料か低廉です。また、日本のアプリでは商品説明、価格とも日本語に自動翻訳されて表示されますが、おそらくフランス語であればフランス語、ユーロになり、英語であれば英語、ドルになり、ロシア語であればロシア語、ルーブルになるというかたちで、価格の使い分けはされていないのだと思われます。

にもかかわらず、キーワードとしては「アバヤ・モロッコ風」、「ドバイ風」、「トルコ風」、「アラビア風」などが出てきて、やはりファッションがあるわけです。そこのファッションをたとえばフランスの移民の女性たちが着る、アメリカの移民の女性たちが着るというかたちです。私は専門ではないのでわからないですが、義烏で聞いた話を開陳しますと、「義烏の何がすごいか、きみ知っているか」と言われて「何がすごいんでしょうか」と訊いたら、「サンプルがあれば48時間で何ダースも出荷できる」という話でした。いわゆるコピー文化と言えばいいのかもしれませんが、とにかく速いのです。ですから、まさに電光石火のようにファッションが伝播していく。かつてはファクスでしたが、現在はネットで、「こんな感じのものを作って」と伝えると、「こんな感じかい?」とサンプルができて、「それを何ダース作って」という発注が入る。それもオンラインで入ってくるので、おそらく流行もまったく速さが違ってきているのではないかなという気がします。

現在はどうかわかりませんが、一時ユニクロがイスラーム・ファッションに進出するといって話題になったことがありますが、いろいろ見ていると、価格的に競争にならないですね。高過ぎです。ユニクロ・

ファッションではなくて、もう少し下のプライベート・ブランドでおしゃれをしたい全世界のムスリマに関しては、中国のアリババなどのサイトで買うのはベストの選択ではないかという気がします。お店に買いに行ってもどうせ同じようなものしかないわけですし、そういうところに出入りして変に目を付けられるのもいやですよね。そうなると、家でゆったりスマホで選んで注文をして家に届くというのは、私たちがこれまで経験したことがないようなファッションのあり方だと思いますが、ありなんだなと納得しております。

■流行を生み出し発信し、流通と決裁を押さえて もはや世界中で「切れない存在」となった中国

松本　次に杉本先生の布の話についてです。かつて日本で考え出された刺繍の付いたものが輸出されて流行ったという話がありましたが、おそらく中国でも同じことが言えると思います。もちろん年によって流行がまったく違ったりもしますが、いまサイトを見ていて、キラキラする石を衣装にたくさん手で刺繍しているのはやはり高いですよね。ところが、シンプルなキラキラ・ストーンをつけたドレスなら、日本円で1,200円ぐらいで買えてしまう。ですので、発展途上国の若い女性にも、あるいはフランスのパリの郊外にいるような若い女性にも手を出しやすい商品なのではないでしょうか。つまり発信と流通事情、それから決済事情がとてもうまくいって、現在このAliExpressのようなアプリができているのではないかという気がしております。

その意味では、越境は十分にあり得えます。ある商品が何個売れているのかを調べて、たとえば1,200ぐらいだと「流行っているな」と思ってコメント欄を見ると、コメントは本当に世界中から入っています。そうすると見ている人は、「世界的に流行ってるじゃん」ということになりますよね。本当に中国恐るべしで、よくウイグル問題で「不買運動をなぜ起こさないのか」、「イスラーム諸国は何をやっているのか」と言う人がいますが、実際に中国を切れるのかと言うと、おそらく切れないのが現状だと思います。

最後に、ニーズがあってそれに応えているのかという話で思い出したことがあります。2020年に、ヘジャブの下にかぶるある機能のついたキャップが発売されました。耳の部分にマスクをかけるためのボタンが付いている商品です。そういうニーズがコロナ禍で2020年に生まれたので、急遽作って、アリババで売る。それがまた一つのファッションになっていくという循環が見られるかと思います。

帯谷　ありがとうございました。これからディスカッションを深めたいところですが、残念ながらあっという間に時間が来てしまいました。みなさんのお話をお伺いして、一言ではまとめられない充実した思いでいっぱいです。ご報告者のみなさん、コメンテーターのみなさんからいただいたお話は、全体として本当にカラフルで厚みがあり、もう目も心も頭も満たされましたし、楽しませていただきました。本日のお話では、ある地域や民族特有の装いの商品化や流通、価値付けといった観点が、これまでのワークショップと比べるとかなりクローズアップされてきた印象を受けました。今回はどんなサブタイトルを付けようかと、いま考えているところです。

それでは、これで閉会とさせていただきます。とても実りある時間でした。報告者とコメンテーターのみなさん、参加者のみなさん、本当にありがとうございました。

ワークショップ

装いと規範 第4回

日時：2021年2月6日（月）13:00–17:00

Zoomによるオンライン開催

プログラム

13:00–13:10 趣旨説明

帯谷 知可（京都大学東南アジア地域研究研究所）／**後藤 絵美**（東京大学東洋文化研究所）

13:10–16:10 報告

報告1

古着から展示可能な民族衣装へ —— 中国少数民族の装いにおけるグローバルな広がりと価値の変遷

佐藤 若菜（新潟国際情報大学）

報告2

ナミビア・ヘレロ人のエスニックドレスに見る歴史性とファッション —— 4つのショーから

香室 結美（熊本大学）

報告3

唯物論の神はイスラームグッズに祝福を与え給う —— 世界の工場 中国の経験を垣間見る

松本 ますみ（室蘭工業大学）

16:10–17:00 コメントとディスカッション

コメンテータ　**安城 寿子**（阪南大学）／**杉浦 未樹**（法政大学）／**杉本 星子**（京都文教大学）

主　催：＊新学術領域研究「グローバル関係学」（グローバル秩序の溶解と新しい危機を超えて —— 関係性中心の融合型人文社会科学の確立）研究計画B01「規範とアイデンティティ —— 社会的紐帯とナショナリズムの間」（研究代表者：酒井啓子）

共　催：＊京都大学東南アジア地域研究研究所CIRAS共同利用・共同研究「中央ユーラシアおよび中東ムスリムの家族・ジェンダーをめぐる規範 —— 言説とネットワークの超域的展開」（2020年度、研究代表者：磯貝真澄）

CIRAS Discussion Paper No.102

帯谷知可・後藤絵美編

装いと規範4
――「価値」が生まれるとき

発　行……2021年3月
発行者……京都大学東南アジア地域研究研究所
京都市左京区吉田下阿達町46　〒606-8501
電話: 075-753-7302　FAX: 075-753-9602

DTP・印刷……英明企画編集株式会社